平成２９年度郷土歴史講座

「越谷市内新方（にいがた）地区の歴史」

講師　加藤幸一　氏

（ＮＰＯ法人越谷市郷土研究会　顧問）

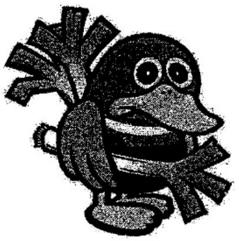
郷土の歴史について、わかりやすくお話をしていただきます

Bコース（第1回・第2回）

Aコース（第1回～第3回）

	日程	時間	募集	内容	場所	備考
第1回	6月 7日（水）	午後2時 ～午後4時	80人 定員	講座	市立図書館 2階 視聴覚ホール	Aコース受講の方は必ず2日間ご参加ください
第2回	6月14日（水）					
第3回	6月21日（水） または 6月28日（水）	午前9時 ～午後5時 （予定）	各日 20人 定員	現地研修 （バス乗車 ＆徒歩）	新方（にいがた）地区の 歴史めぐり	現地研修は各日同一の内容です 希望日をお書きください

申込方法



越谷特別市民
ガーヤちゃん

◎往復はがきでお申し込みください

○受付期間　5月25日（木）市立図書館必着

○記入事項

①Aコース：講座と現地研修　　3日間コース
　Bコース：講座のみ　　　　　2日間コース

※Aコース（現地研修の希望日をお書きください）か　Bコースを明記してください

※現地研修のみの申込みはできません

②郵便番号　③住所　④受講希望者氏名（1枚につき1人）　⑤電話番号

※希望者多数の場合は抽選となります

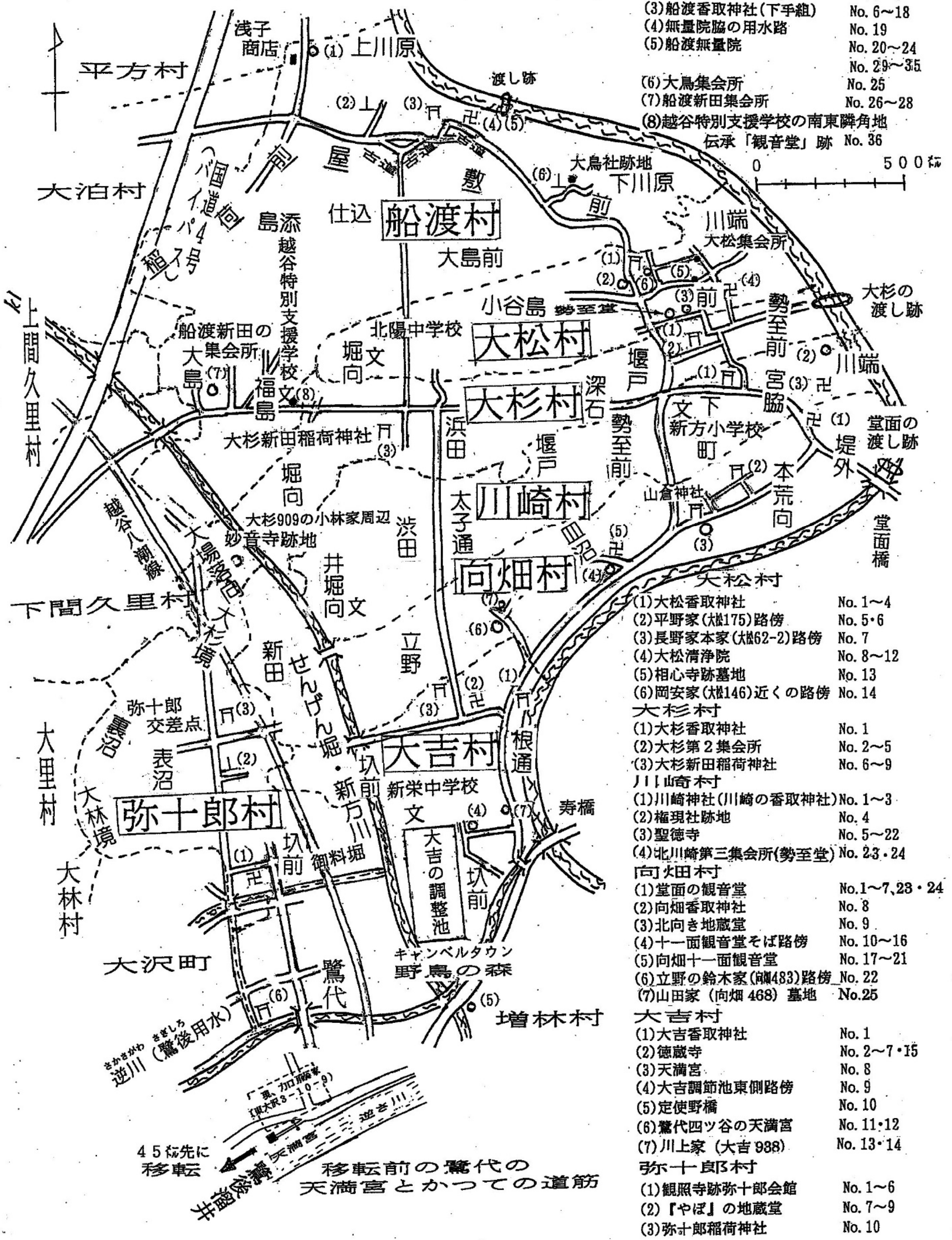
※テキスト代・受講料等は無料です

あて先・問い合わせ先
〒343−0023　越谷市東越谷4−9−1
越谷市立図書館　郷土歴史講座担当
【電話　048−965−2655】

越谷市立図書館主催　平成２９年度　郷土歴史講座

「越谷市内新方地区の歴史」

石仏案内図


浅子商店
(1) 上川原
平方村
(2)
(3)
(4)(5)
渡し跡
旧国道4号バイパス
稲荷向
町屋古道
敷
大泊村
島添
越谷特別支援学校
仕込
船渡村
大島前
(6) 大鳥社跡地
下川原
前
川端
大松集会所
(1)(2)(6)(5)(3)(4)
前
大杉の渡し跡
小谷島
勢至堂
大松村
北陽中学校
堀向
上間久里村
船渡新田の集会所
大島 (7)
福島 (8)
大杉村
深石
浜田
堰戸
勢至前
宮脇
川端
大杉新田稲荷神社 (3)
下
新方小学校
町
(1) 堂面の渡し跡
堤外
堀向
堰戸
勢至前
本荒向
(2)
山倉神社
(3)
堂面橋
越谷八潮線
大杉909の小林家周辺
妙音寺跡地
浜田
太子通
川崎村
(5)
(4)
向畑村
下間久里村
大場境
大杉境
井堀向
新田
(7)
(6)
立野
せんげん堀
(1)(2)(3)
弥十郎交差点
(3)
表沼
(2)
元荒川
大吉村
根通
大里村
大林境
弥十郎村
圦前
新方川
新栄中学校
(4)(7)
寿橋
(1)
圦前
御料堀
大吉の調整池
圦前
大林村
大沢町
キャンベルタウン野鳥の森
鷺代
(6)
(5)
増林村
逆川（鷺後用水）
さかさがわ　さぎしろ
逆川
天満宮
45ｍ先に移転
鷺後用水
移転前の鷺代の天満宮とかつての道筋
0
500ｍ

船渡村

(1)浅子家近くの路傍	No. 1
(2)上組集会所	No. 2～5
(3)船渡香取神社(下手組)	No. 6～18
(4)無量院脇の用水路	No. 19
(5)船渡無量院	No. 20～24 No. 29～35
(6)大鳥集会所	No. 25
(7)船渡新田集会所	No. 26～28
(8)越谷特別支援学校の南東隣角地 伝承「観音堂」跡	No. 36

大松村

(1)大松香取神社	No. 1～4
(2)平野家(大松175)路傍	No. 5･6
(3)長野家本家(大松62-2)路傍	No. 7
(4)大松清浄院	No. 8～12
(5)相心寺跡墓地	No. 13
(6)岡安家(大松146)近くの路傍	No. 14

大杉村

(1)大杉香取神社	No. 1
(2)大杉第２集会所	No. 2～5
(3)大杉新田稲荷神社	No. 6～9

川崎村

(1)川崎神社(川崎の香取神社)	No. 1～3
(2)権現社跡地	No. 4
(3)聖徳寺	No. 5～22
(4)北川崎第三集会所(勢至堂)	No. 23・24

向畑村

(1)堂面の観音堂	No.1～7､23・24
(2)向畑香取神社	No. 8
(3)北向き地蔵堂	No. 9
(4)十一面観音堂そば路傍	No. 10～16
(5)向畑十一面観音堂	No. 17～21
(6)立野の鈴木家(向畑483)路傍	No. 22
(7)山田家（向畑 468）墓地	No.25

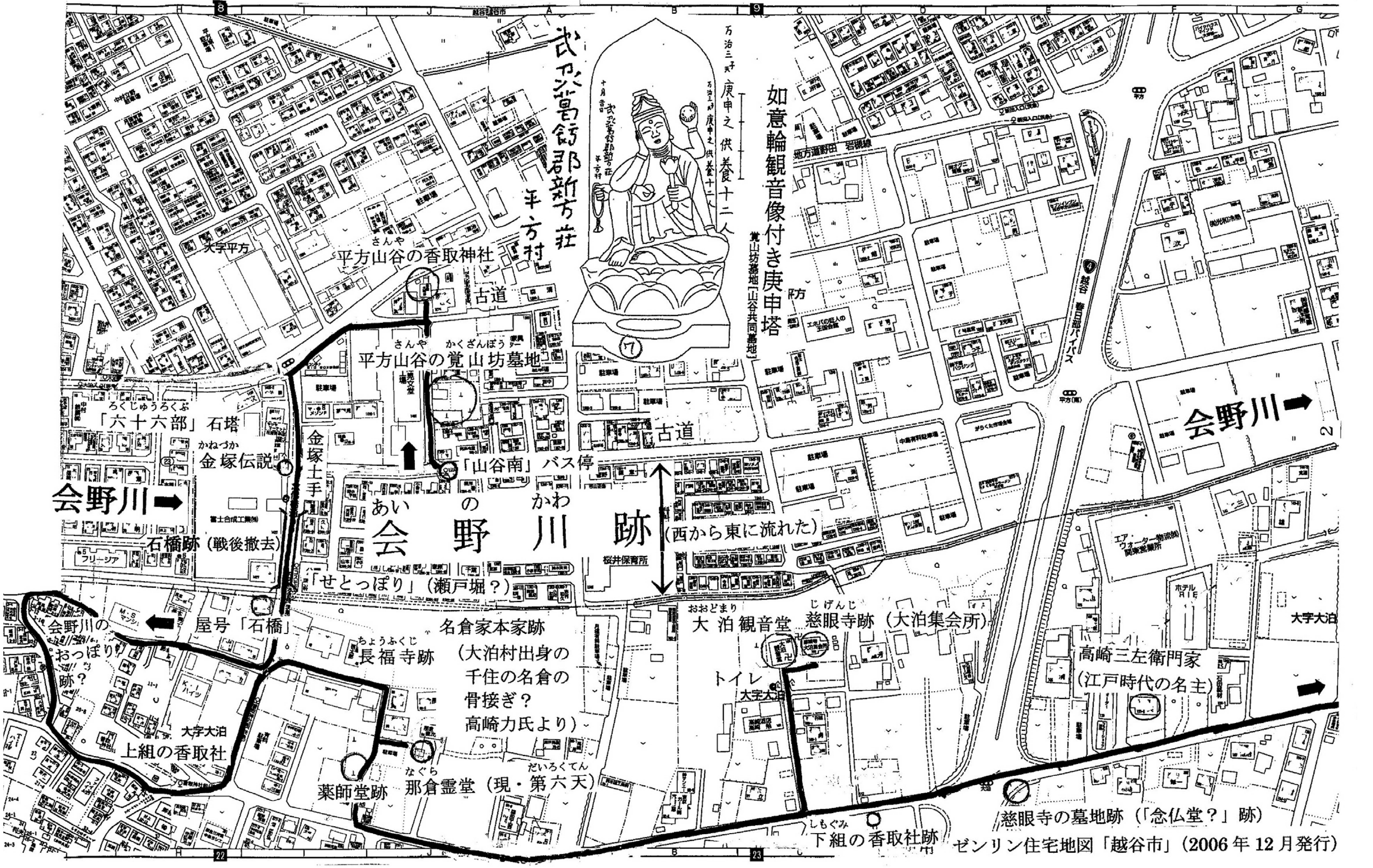
大吉村

(1)大吉香取神社	No. 1
(2)徳蔵寺	No. 2～7･15
(3)天満宮	No. 8
(4)大吉調節池東側路傍	No. 9
(5)定使野橋	No. 10
(6)鷺代四ツ谷の天満宮	No. 11･12
(7)川上家（大吉 938）	No. 13･14

弥十郎村

(1)観照寺跡弥十郎会館	No. 1～6
(2)『やぼ』の地蔵堂	No. 7～9
(3)弥十郎稲荷神社	No. 10

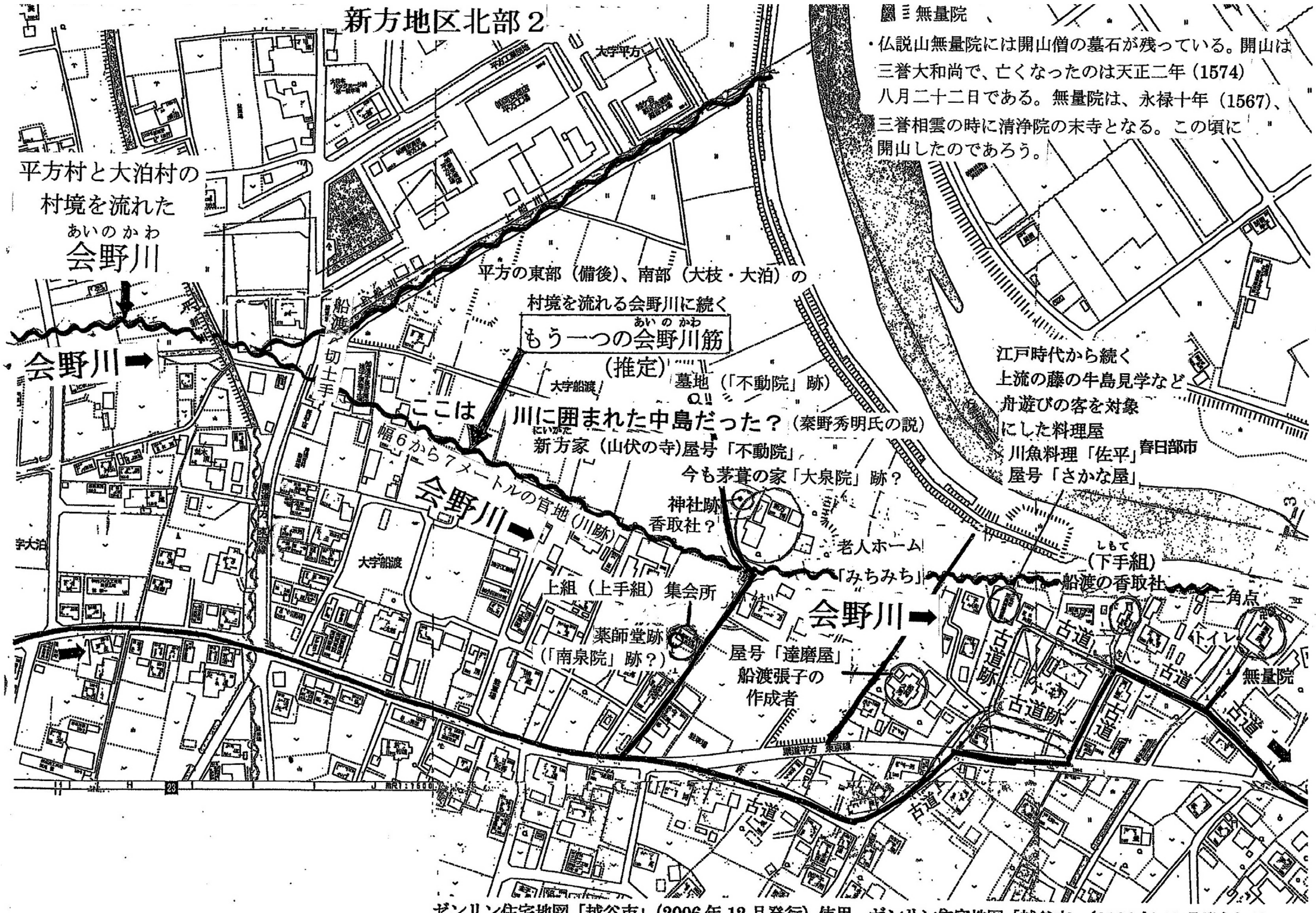
新方地区北部１



武州葛飾郡新方荘 平方村
十月吉日
武州葛飾郡新方荘 平方村
万治三子天 庚申之供養十二人
万治三子天 庚申之供養十二人
⑰
如意輪観音像付き庚申塔
覚山坊墓地［山谷共同墓地］
さんや 平方山谷の香取神社
古道
さんや かくざんぼう 平方山谷の覚山坊墓地
ろくじゅうろくぶ 「六十六部」石塔
かねづか 金塚伝説
金塚土手
「山谷南」バス停
古道
会野川➡
会野川➡
あい の かわ 会 野 川 跡
（西から東に流れた）
石橋跡（戦後撤去）
「せとっぽり」（瀬戸堀？）
会野川のおっぽり跡？
屋号「石橋」
名倉家本家跡
（大泊村出身の千住の名倉の骨接ぎ？ 高崎力氏より）
ちょうふくじ 長福寺跡
おおどまり 大泊観音堂
じげんじ 慈眼寺跡（大泊集会所）
トイレ
高崎三左衛門家（江戸時代の名主）
➡
上組の香取社
薬師堂跡
なぐら 那倉霊堂（現・第六天）
だいろくてん
慈眼寺の墓地跡（「念仏堂？」跡）
しもぐみ 下組の香取社跡
大字平方
大字大泊
大字大泊
大字大泊
桜井保育所
越谷春日部バイパス

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）

新方地区北部２

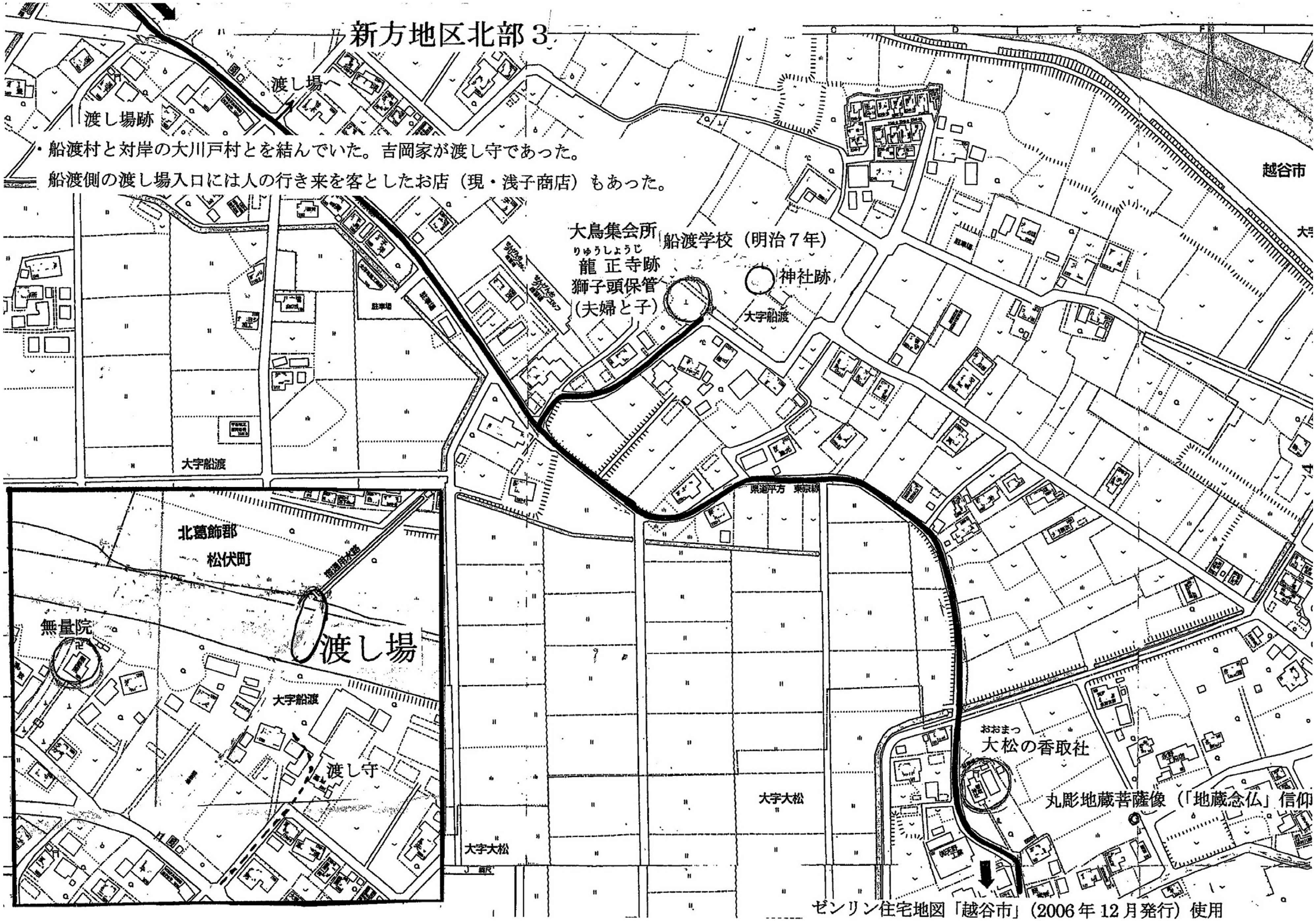


- 仏説山無量院には開山僧の墓石が残っている。開山は三誉大和尚で、亡くなったのは天正二年（1574）八月二十二日である。無量院は、永禄十年（1567）、三誉相雲の時に清浄院の末寺となる。この頃に開山したのであろう。

無量院
平方村と大泊村の村境を流れた会野川（あいのかわ）
会野川
平方の東部（備後）、南部（大枝・大泊）の村境を流れる会野川に続く
もう一つの会野川（あいのかわ）筋
（推定）
墓地（「不動院」跡）
船渡
切土手
ここは
川に囲まれた中島だった？（秦野秀明氏の説）
新方（にいがた）家（山伏の寺）屋号「不動院」
幅６から７メートルの官地（川跡）
会野川
今も茅葺の家「大泉院」跡？
神社跡
香取社？
老人ホーム
「みちみち」
江戸時代から続く
上流の藤の牛島見学など
舟遊びの客を対象
にした料理屋
川魚料理「佐平」
屋号「さかな屋」
春日部市
（下手（しもて）組）
船渡の香取社
三角点
上組（上手組）集会所
会野川
薬師堂跡
（「南泉院」跡？）
屋号「達磨屋」
船渡張子の
作成者
古道
古道跡
古道跡
古道
古道
トイレ
古道
無量院
古道
古道
古道
大字船渡
大字船渡
大字平方
字大泊

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）使用 ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）使用

新方地区北部３

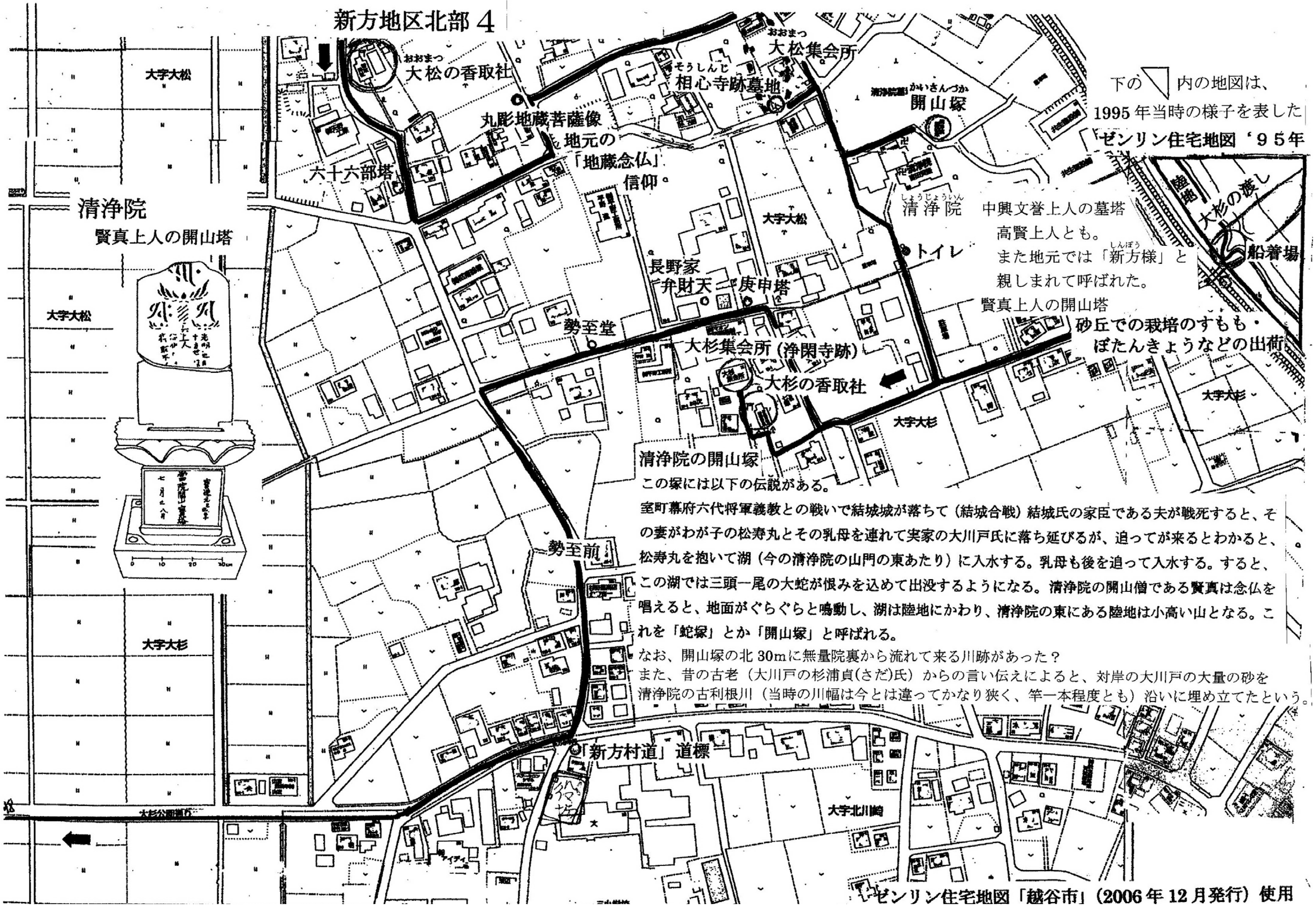


・船渡村と対岸の大川戸村とを結んでいた。吉岡家が渡し守であった。
船渡側の渡し場入口には人の行き来を客としたお店（現・浅子商店）もあった。

渡し場
渡し場跡
大鳥集会所
りゅうしょうじ
龍正寺跡
獅子頭保管
(夫婦と子)
船渡学校（明治７年）
神社跡
大字船渡
越谷市
駐車場
県道平方 東京線
大字大松
おおまつ
大松の香取社
丸彫地蔵菩薩像（「地蔵念仏」信仰
北葛飾郡
松伏町
無量院
渡し場
大字船渡
渡し守

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）使用

新方地区北部４


おおまつ
大松の香取社
丸彫地蔵菩薩像
地元の「地蔵念仏」信仰
六十六部塔
そうしんじ
相心寺跡墓地
おおまつ
大松集会所
かいさんづか
開山塚
清浄院
賢真上人の開山塔
長野家
弁財天
庚申塔
トイレ
勢至堂
大杉集会所（浄閑寺跡）
大杉の香取社
勢至前
「新方村道」道標
陸地
大杉の渡し
船着場
大字大松
大字大杉
大字北川崎
大杉公園通り

下の◺内の地図は、1995年当時の様子を表したゼンリン住宅地図‘９５年

清浄院　中興文誉上人の墓塔
高賢上人とも。
また地元では「新方様」と
親しまれて呼ばれた。
賢真上人の開山塔

砂丘での栽培のすもも・ぼたんきょうなどの出荷

清浄院の開山塚

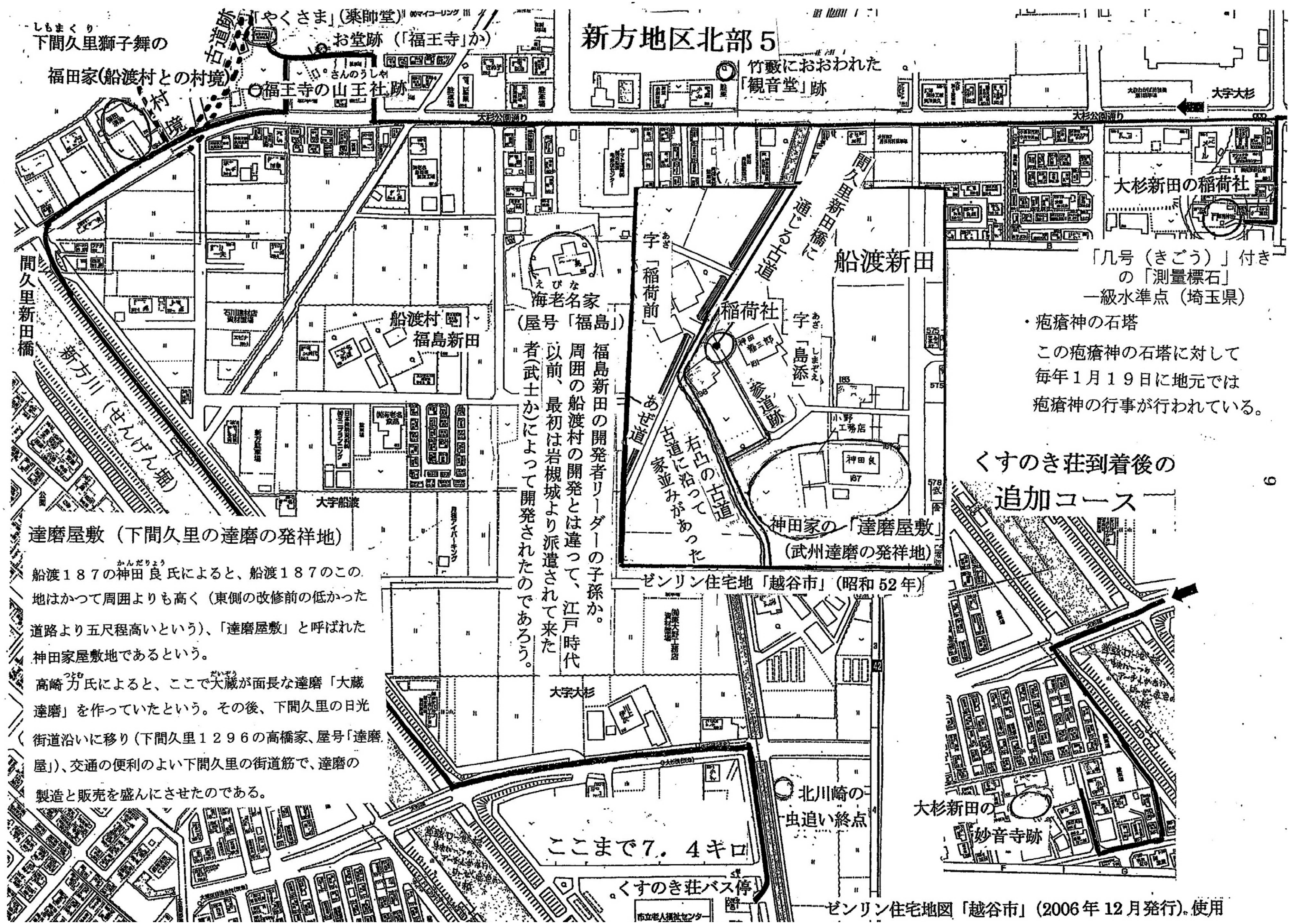
この塚には以下の伝説がある。

室町幕府六代将軍義教との戦いで結城城が落ちて（結城合戦）結城氏の家臣である夫が戦死すると、その妻がわが子の松寿丸とその乳母を連れて実家の大川戸氏に落ち延びるが、追ってが来るとわかると、松寿丸を抱いて湖（今の清浄院の山門の東あたり）に入水する。乳母も後を追って入水する。すると、この湖では三頭一尾の大蛇が恨みを込めて出没するようになる。清浄院の開山僧である賢真は念仏を唱えると、地面がぐらぐらと鳴動し、湖は陸地にかわり、清浄院の東にある陸地は小高い山となる。これを「蛇塚」とか「開山塚」と呼ばれる。

なお、開山塚の北 30mに無量院裏から流れて来る川跡があった？
また、昔の古老（大川戸の杉浦貞(さだ)氏）からの言い伝えによると、対岸の大川戸の大量の砂を清浄院の古利根川（当時の川幅は今とは違ってかなり狭く、竿一本程度とも）沿いに埋め立てたという。

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006年12月発行）使用

新方地区北部５


下間久里（しもまくり）獅子舞の
福田家(船渡村との村境)
古道跡
「やくさま」(薬師堂)
お堂跡（「福王寺」か）
福王寺の山王社（さんのうしゃ）跡
村境
竹藪におおわれた
「観音堂」跡
大杉公園通り
大字大杉
大杉新田の稲荷社
間久里新田橋
新方川（せんげん堀）
船渡村
福島新田
海老名（えびな）家
(屋号「福島」)
間久里新田橋に通じる古道
船渡新田
字（あざ）「稲荷前」
稲荷社
字（あざ）「島添（しまぞえ）」
参道跡
あぜ道
右凸の古道
古道に沿って家並みがあった
神田家の「達磨屋敷」
(武州達磨の発祥地)
ゼンリン住宅地「越谷市」(昭和 52 年)
大字船渡
大字大杉
北川崎の
虫追い終点
ここまで７．４キロ
くすのき荘バス停
くすのき荘到着後の
追加コース
大杉新田の
妙音寺跡

福島新田の開発者リーダーの子孫か。周囲の船渡村の開発とは違って、江戸時代以前、最初は岩槻城より派遣されて来た者(武士か)によって開発されたのであろう。

「几号（きごう）」付きの「測量標石」
一級水準点（埼玉県）

・疱瘡神の石塔

この疱瘡神の石塔に対して毎年１月１９日に地元では疱瘡神の行事が行われている。

達磨屋敷（下間久里の達磨の発祥地）

船渡１８７の神田良（かんだりょう）氏によると、船渡１８７のこの地はかつて周囲よりも高く（東側の改修前の低かった道路より五尺程高いという)、「達磨屋敷」と呼ばれた神田家屋敷地であるという。

高崎力（つとむ）氏によると、ここで大蔵（だいぞう）が面長な達磨「大蔵達磨」を作っていたという。その後、下間久里の日光街道沿いに移り（下間久里１２９６の高橋家、屋号「達磨屋」)、交通の便利のよい下間久里の街道筋で、達磨の製造と販売を盛んにさせたのである。

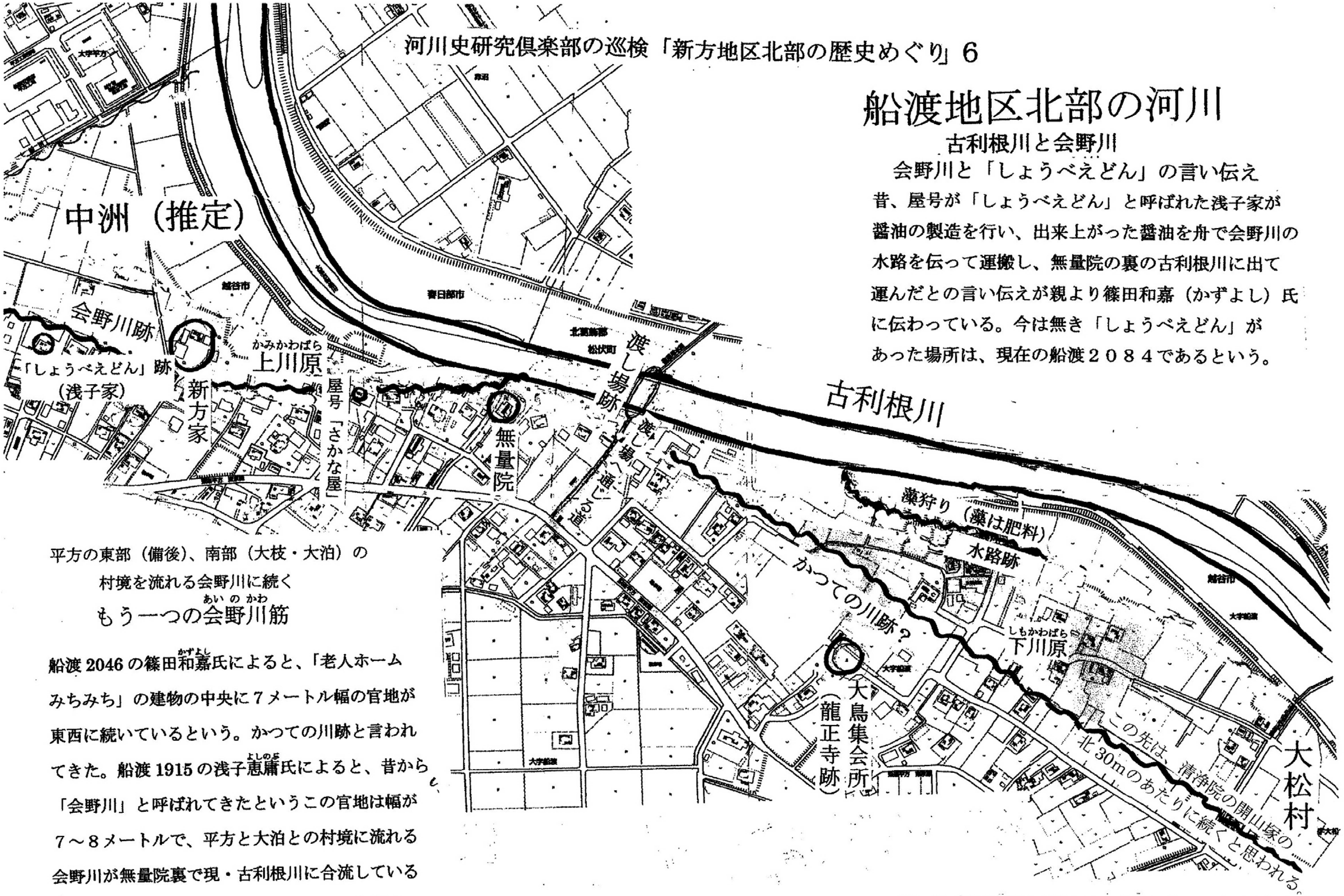
ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006 年 12 月発行)使用

船渡地区北部の河川

古利根川と会野川

会野川と「しょうべえどん」の言い伝え

昔、屋号が「しょうべえどん」と呼ばれた浅子家が醤油の製造を行い、出来上がった醤油を舟で会野川の水路を伝って運搬し、無量院の裏の古利根川に出て運んだとの言い伝えが親より篠田和嘉（かずよし）氏に伝わっている。今は無き「しょうべえどん」があった場所は、現在の船渡２０８４であるという。


中洲（推定）
会野川跡
「しょうべえどん」跡
（浅子家）
新方家
かみかわばら
上川原
屋号「さかな屋」
無量院
渡し場跡
渡し場へ通じる道
古利根川
藻狩り（藻は肥料）
水路跡
かつての川跡？
しもかわばら
下川原
大鳥集会所（龍正寺跡）
この先は、清浄院の開山塚の北30mのあたりに続くと思われる。
大松村
越谷市
春日部市
北葛飾郡
松伏町
大字平方
大字船渡

平方の東部（備後）、南部（大枝・大泊）の
村境を流れる会野川に続く

もう一つの会野川（あいのかわ）筋

船渡 2046 の篠田和嘉（かずよし）氏によると、「老人ホームみちみち」の建物の中央に７メートル幅の官地が東西に続いているという。かつての川跡と言われてきた。船渡 1915 の浅子恵庸（よしのぶ）氏によると、昔から「会野川」と呼ばれてきたというこの官地は幅が７～８メートルで、平方と大泊との村境に流れる会野川が無量院裏で現・古利根川に合流しているという。

加藤幸一

ゼンリン住宅地図「越谷市」（2006 年 12 月発行）使用

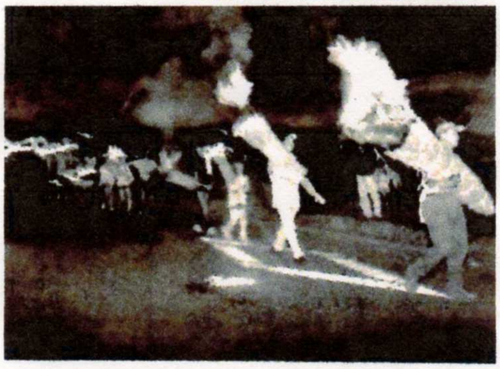
北川崎の虫追い（虫送り）

北川崎の虫追い

虫追いは、古代より稲作の普及に伴い、自然発生的に起こったもので、戦前は何処の地方でも農村の年中行事の一つであった。

地方によっては、害虫の発生をある怨霊のたたりとして、宗教的に昼間に行う虫送りもあるが、越谷地方の虫追いは夜間行われ、各農家が麦藁で作ったたいまつを夕方鎮守の社前に持ち寄り豊作祈願の後、御神燈よりたいまつに点火して、鉦太鼓を先頭に「稲の虫ホーイホイ」と囃し立てながら字（あざ）境まで練り歩くもので、戦前は一村挙げて同夜に行ったので村の耕地は一面火の海のごとき壮観を呈したというが、戦後の極端な農薬の使用と急速な開発のため虫追いの行事は殆ど姿を消した。

越谷市では市東北の北川崎地区にのみその行事が続き、県の無形文化財として、毎年七月二十四日の夜行われ往時を偲ぶよすがとなっている。



たいまつを持ち、一列になって行進します

（第１９回越谷市民文化祭の郷土史部門出品紹介・石塚吉男氏著）

新方地区の虫送り

新方地区の北川崎などでは、今でも七月二十四日に、稲に虫がつかないようにとお祈りする、虫送りの行事がおこなわれています。この日夕暮れどきになると、農家の人々が鎮守（ちんじゅ）の社（やしろ）に集まり、お神酒（みき）をあげ、灯明（とうみょう）をともして豊作を祈ります。その後麦わらで作った大きなたいまつを、御神灯（ごしんとう）の火でもやし、行列をつくって田んぼのあぜ道を行進します。

先頭は神社からいただいた「ゴヘイ」（神様のお札）を持った人、次に棒を通して二人でかついだ大太鼓（おおだいこ）とこれをたたく人、次に小太鼓二つとこれをたたく人、次に鉦（かね）をたたく人、そしてそのあとから火のついた麦わらのたいまつをもった人びとが「ホウイ、ホウイ」と大きな声でさけびながら続きます。

そのころは、もう広々とした耕地も暗（くら）くなり、たいまつの火だけがあかあかと夜空にうかびます。こうして田んぼの中を進み、村の境までくると「ゴヘイ」を田の中に立て、たいまつをつみかさねます。このたいまつがもえつきるころ、一同手を打って解散します。

この虫送りがはじまったのは、西方村（相模町）の記録では、今からおよそ二〇〇年近く前の寛政三年（一七九一）のこととありますので、このころから広まったとみられます。

もっとも、虫はあかりを求めて集まってくるので、農薬がなかった昔には虫を退治（たいじ）するよい方法であったに違いません。現在は火災の心配からほとんど行われていませんので、今でも虫送りをやっているということは、たいへん珍しいことです。これも昔の生活を伝える文化行事の一つですので、ながく残しておきたいものですね。

（Ｓ59・7・1日の越谷広報「越谷のれきし(69)新方地区の虫送り」本間清利氏著より）

新方地区の村々の虫追い

永野仁（ひとし）氏の調査報告を以下のようにまとめました。

１．船渡の虫追いと天神様

７月２４日の夕方、船渡の虫追いは新方地区の村々の先陣を切って行われ、周囲の村々はそれを確認してから虫追いを始めたという。船渡はいろいろな面でこのあたりの村々の中核を担ったのであろう。船渡の虫追いのコースは、船渡の香取社を出発して平新堀方面に向かい、平新堀に沿って南下し、現在の北陽中学校の北西角まできて、ここの大松との村境で終了した。戦前に廃止されたままのようだ。

鈴木千代（８８歳）氏によると、６歳の頃（昭和１０年頃）に船渡の虫追いのタイマツの炎を遠くから見た覚えがあるという。その後、船渡の虫追いはタイマツに代って円筒形の細長い大きな提灯（弓張提灯か）となる。戦前のことである。船渡の虫追いが戦前まで行われていた裏付けとなる貴重な証言である。

戦前の船渡では、７月２４日の朝、船渡の天神様として周辺の村々に知られた天神社にて「朝天神」が行われ、たいそう賑わった。船渡１９４５の並木家の屋号は「天神前」と呼ばれ、天神社に通じる道沿いには屋台も出ていた。天神社は船渡９２４－１、９２４－２の篠田家の東隣にあった。夕方になると今度は船渡の香取社から虫追いが行われたのである。

戦後は天神社は船渡の香取社境内に移されている。その香取社では各地の村々の虫追いが終わると「船渡の天神様」として、豊野村や松伏村などからも男女の若者がやってきて、香取社の西側の境内地に設置された舞台での演芸大会が行われたり、映写機による野外の上映会が行われたり、香取社の前の道路では屋台も多く出ていた。当時の娯楽がなかった時代の若者たちの待ちに待った楽しみでもあった。現在でも続いている。

２．大松の虫追い

７月２４日の夕方に行われた。コースは大松の香取社を出て、大松１７５の平野家まで来るとその角を西に向かって農道を進み船渡村との村境（北陽中学校の北東）で終了する。戦後も続いたが、昭和５０年頃にか廃止された。

３．大杉の虫追い

７月２４日の夕方に行われた。コースは大杉の香取社を出発して大杉１０３の永野家南の古道を西に向かい、大杉３０２の「やなぎ家」の前の農道（現在の大杉公園通り）を真西に進んで大杉公園の西端の船渡村との村境で終了する。戦後も続いたが、昭和５５年頃にか廃止された。

４．北川崎の虫追い

７月２４日の夕方に行われた。コースは北川崎の香取社を出発して新方小学校の角を南に向かい、途中の北川崎２４９の鈴木家の角で西に向かい、突き当りを南西にして道なりに進み、くすのき荘方面に向かって大杉村との村境の平新川で終了する。香取社前の東西の道路の交通が激しくなると、香取社から真っ直ぐ南に進む現在のコースに変更して現在も続いている。

５．向畑の虫追い

７月２４日の夕方に行われた。コースは向畑の香取社を出発して向畑の十一面観音堂角で西に向かい、向畑４８３の鈴木家の前を通って弥栄小学校の南、千間堀に突き当たった地点（向畑橋）で終了する。戦後も続いたが、昭和５０年頃に廃止された。

6．大吉の虫追い

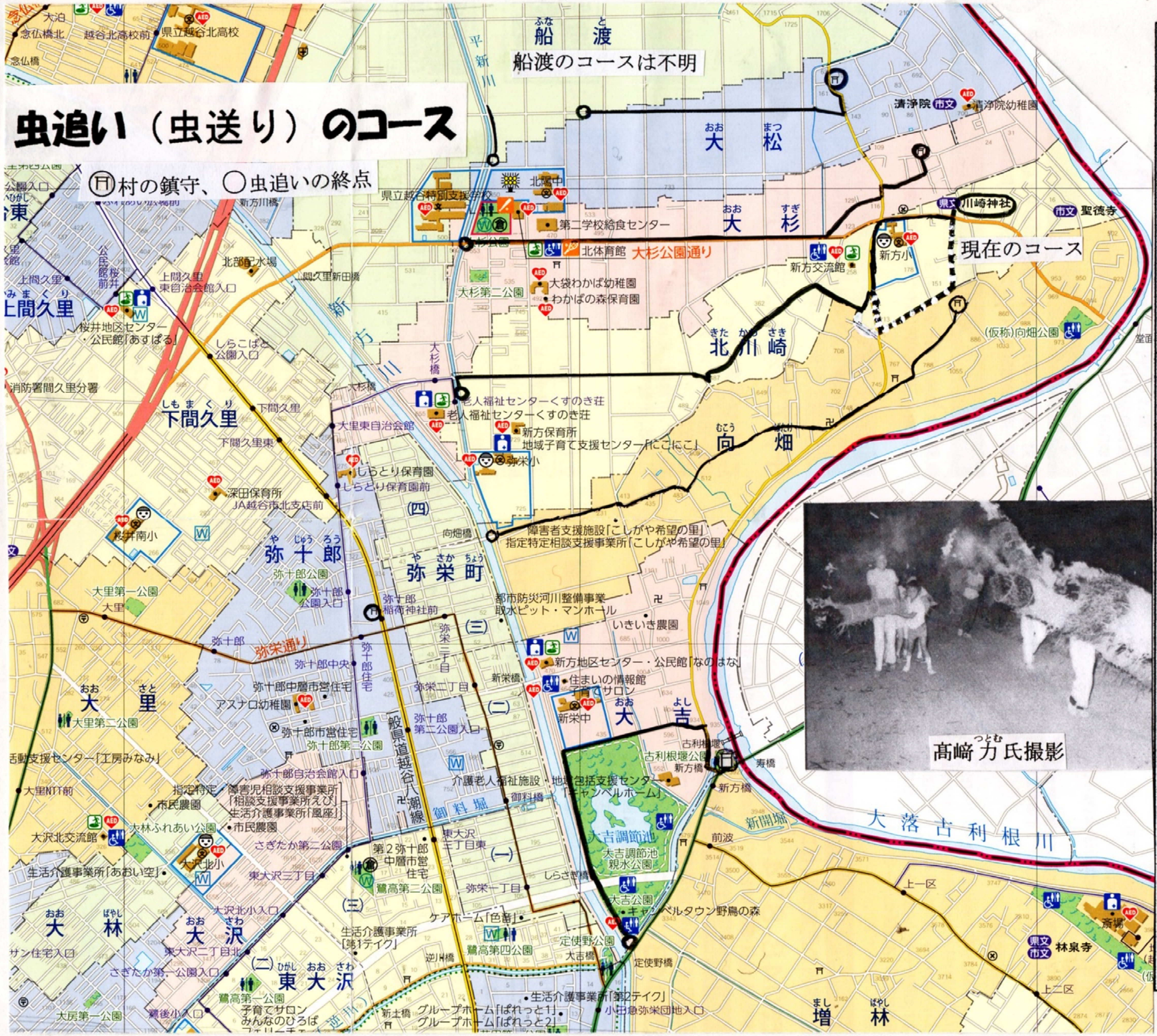
鈴木進志氏からの加藤の聞き取り調査である。七月二十四日の夕方に行われた。コースは大吉の香取社（現在の古利根公園）を出発し、新方橋を渡り、北に向かって百二十メートル先を西に向かい、浅間堀に突き当たって南に向かい、逆川に突き当たって終了した。戦後まもなく廃止された。

7．弥十郎の虫追い

弥十郎の虫追いについては、弥十郎の前自治会長白鳥庄造様（故人）からの原田民自氏の聞き取り調査によると「虫追いは私が子供の頃の戦前には行われていたような気がするが確かな記憶ではない」とのことである。他の村々と同様に戦前までは行われていたのであろう。

虫追い（虫送り）のコース

㊊村の鎮守、○虫追いの終点


船渡のコースは不明
現在のコース
川崎神社
船渡
大松
大杉
北川崎
向畑
弥十郎
弥栄町
大吉
大里
下間久里
上間久里
大林
大沢
東大沢
増林
大落古利根川
新方川
新方橋
古利根公園
大吉調節池
逆川

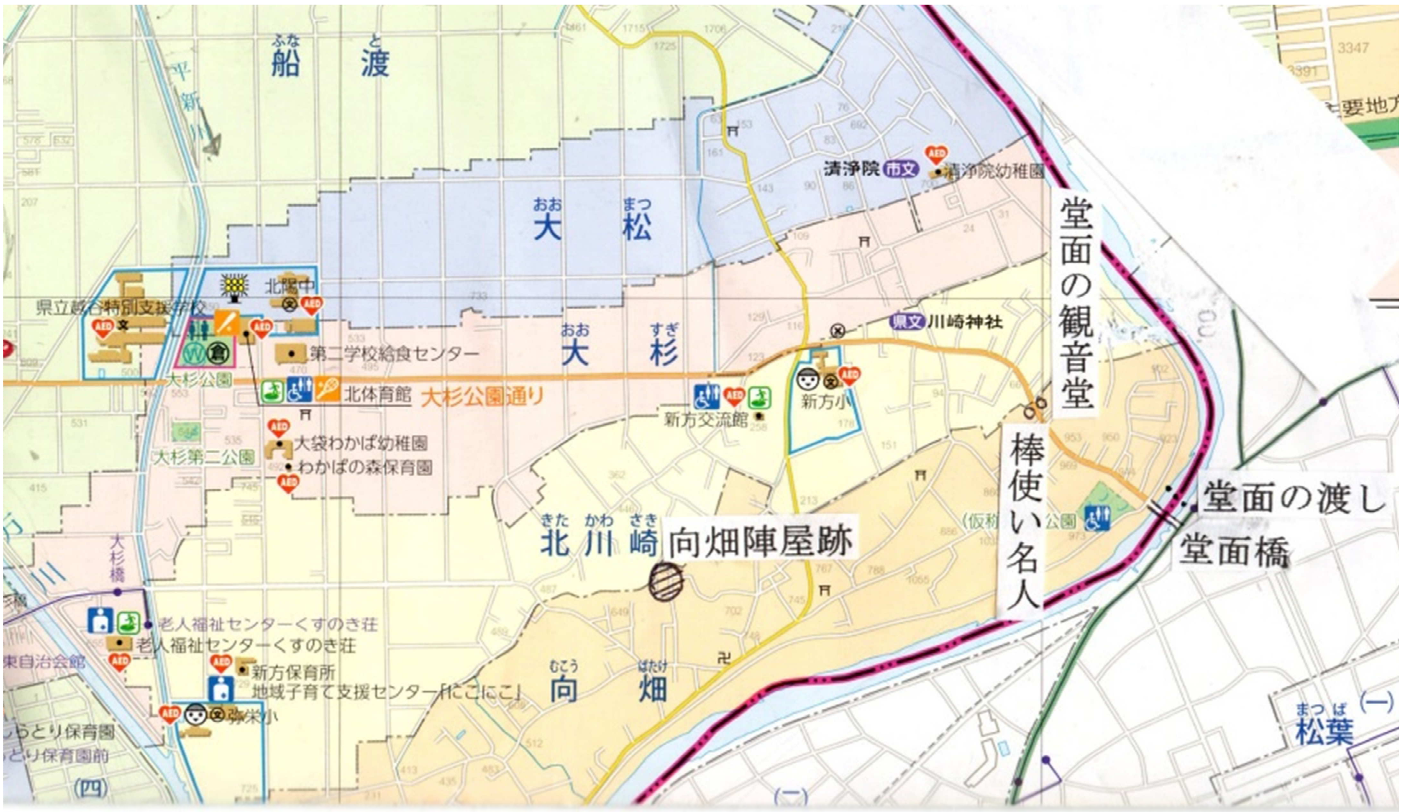
髙﨑力氏撮影

船渡の張子（松崎家2代）

船渡 一八九〇の松崎家は屋号が 達磨屋」と呼ばれ、2代にわたり達磨や張子の製作が行われていたようだ。その技術は大沢の地蔵橋そばの師匠に学んだという 高崎力氏の調査による)。最後に受け継いだ松崎久男氏は、平成二十年頃まで張子を製作し、 船渡の張子」として知られていた。

堂面

「堂面」の観音堂、「堂面橋」やかつては「堂面の渡し」があった。


船渡
大松
大杉
北川崎
向畑
松葉
堂面の観音堂
棒使い名人
堂面の渡し
堂面橋
向畑陣屋跡
清浄院
清浄院幼稚園
川崎神社
新方小
新方交流館
大杉公園通り
北体育館
第二学校給食センター
北陽中
県立越谷特別支援学校
大杉公園
大杉第二公園
大袋わかば幼稚園
わかばの森保育園
老人福祉センターくすのき荘
新方保育所
地域子育て支援センター「にこにこ」
弥栄小
大杉橋
新川

棒使い名人

幕末の棒使い名人「鼠 佐平太」
堂面の観音堂の道路反対側に幕末の棒使いの名人の子孫の浜野家がある。
樫の杖が家宝として保管されている。
小柄で軽業師のようで通称「鼠佐平太」と呼ばれ、草加の松並木で旅人を襲う悪党を懲らしめた。

堂面の渡し

渡し場は、向畑９３５の鈴木家（かつては茅葺屋根の家）の古利根川沿いの河川敷にあって、鈴木家が渡し守をしていた。　対岸は松伏で、松伏のバス停の川側である。
堂面橋は、戦後、自衛隊によって架けられたという。

堂面の観音堂

向畑の観音堂の本尊の聖観音は、１２年に一度の午年に開帳される秘仏である。
堂面の観音堂では古くから「十日面（とおかめん）」という行事が行われてきたが、
本来の行事の内容が伝わっていないのが残念である。

「十丁免（じっちょうめん）」という村は現在の堂面（どうめん）をさし、新方（にいがた）地区の元を築いた村だった？

加藤幸一

金沢称名寺文書（かなざわしょうみょうじもんじょ）の嘉暦（かりゃく）元年（１３２６）の「下総新方検見帳（しもうさにいがたけみ）」（下総国新方郷（にいがたごう）の年貢高（だか）を定めた帳面）の中に、「おま」と「十丁免（じっちょうめん）」の地名がみられる。

金沢称名寺文書とは、鎌倉時代に現在の神奈川県横浜市金沢の称名寺の境内地に金沢文庫という文書（もんじょ）館が設置されていたが、その金沢文庫に保管されていた鎌倉時代の書類である。武士の金沢氏が作ったもので、ここには鎌倉時代の膨大な書籍や古文書（こもんじょ）が今でも保管されている。

新方郷（にいがたごう）とは越谷市にある元荒川（もとあらかわ）・古利根川（ふるとねがわ）と春日部市にある古隅田川（ふるすみだがわ）の三つの川に囲まれた地域をさしている。金沢氏の領地である新方郷（新方庄（にいがたのしょう））に「おま」と「十丁免」の二つの村があったのである。時に鎌倉時代である。

「おま」とは現在の恩間（おんま）をさすことがわかっている。かつて「恩間は忍間（「おしま」と読むのか）とも「おま」とも記され」（本間清利著「越谷ふるさと散歩・上」の１４４頁）ていたからである。

一方の「十丁免」についてはわかっていない。しかしながら一部の研究者の間では、現在の堂面（どうめん）の地域ではないかと推測している。その根拠は、堂面の観音堂で「十日面（とおかめん）」の行事が行われていたことから「十日面」を「十丁（じっちょう）免」と結びつけて類推したことであろう。

すると鎌倉時代の金沢称名寺文書に出てくる「十丁免」（現在の向畑の堂面を含む地域）は新方荘の内の東新方の中心となり、「おま」（現在の恩間を含む地域）は、西新方の中心となっていたのであろう。「おま」は大袋地区の元を築いた村であり、「十丁免」は新方地区の元を築いた村と言えるのではなかろうか。

向畑陣屋跡（むこうばたけじんや）

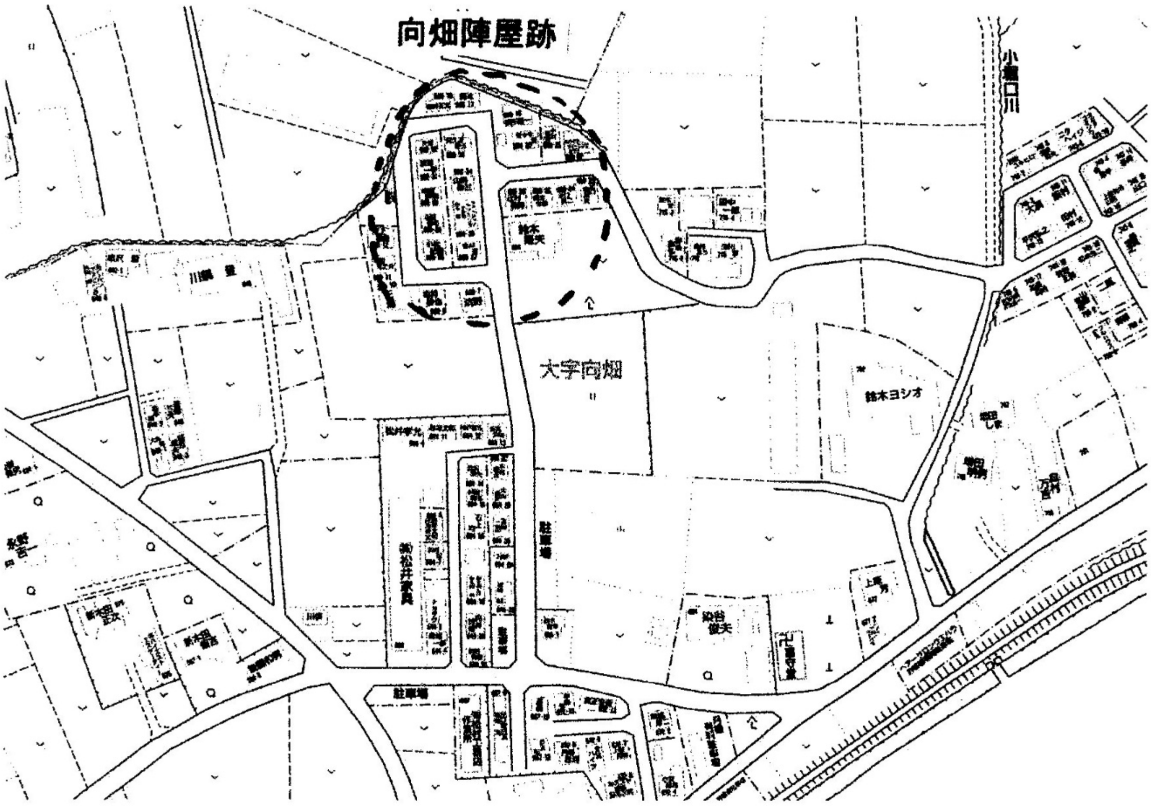
川崎村との境の向畑六六〇番地あたりに、古来より「向畑陣屋」と地元で呼ばれた地があった。かつては周囲よりかなり高く、構え堀も周囲に見られていた。江戸時代以前の新方（にいがた）氏の陣屋跡地である。

文化年間に書かれた『大沢猫の爪』によると、新方三郎が向畑陣屋耕地に住み、十七軒ほどの郎党（家来）を従えていた。十二月二十二日に餅をついていた雪の降る夜、小田原北条氏に攻められて降参した。以後、新方氏は仏門に入り、法師武者となって謹慎した。その他の郎党はすべて百姓になった。これにより地元では、年内には餅をつかず、年が明けた正月になって初めて「若餅」をつくという。江戸時代以前のことではあるが、真実性を増す年代が明記されていないのが残念である。

次にあげる『大松村栄広山由緒著聞書』から実は高賢上人の時代で、北条氏ではなく八条氏と考えられないか。

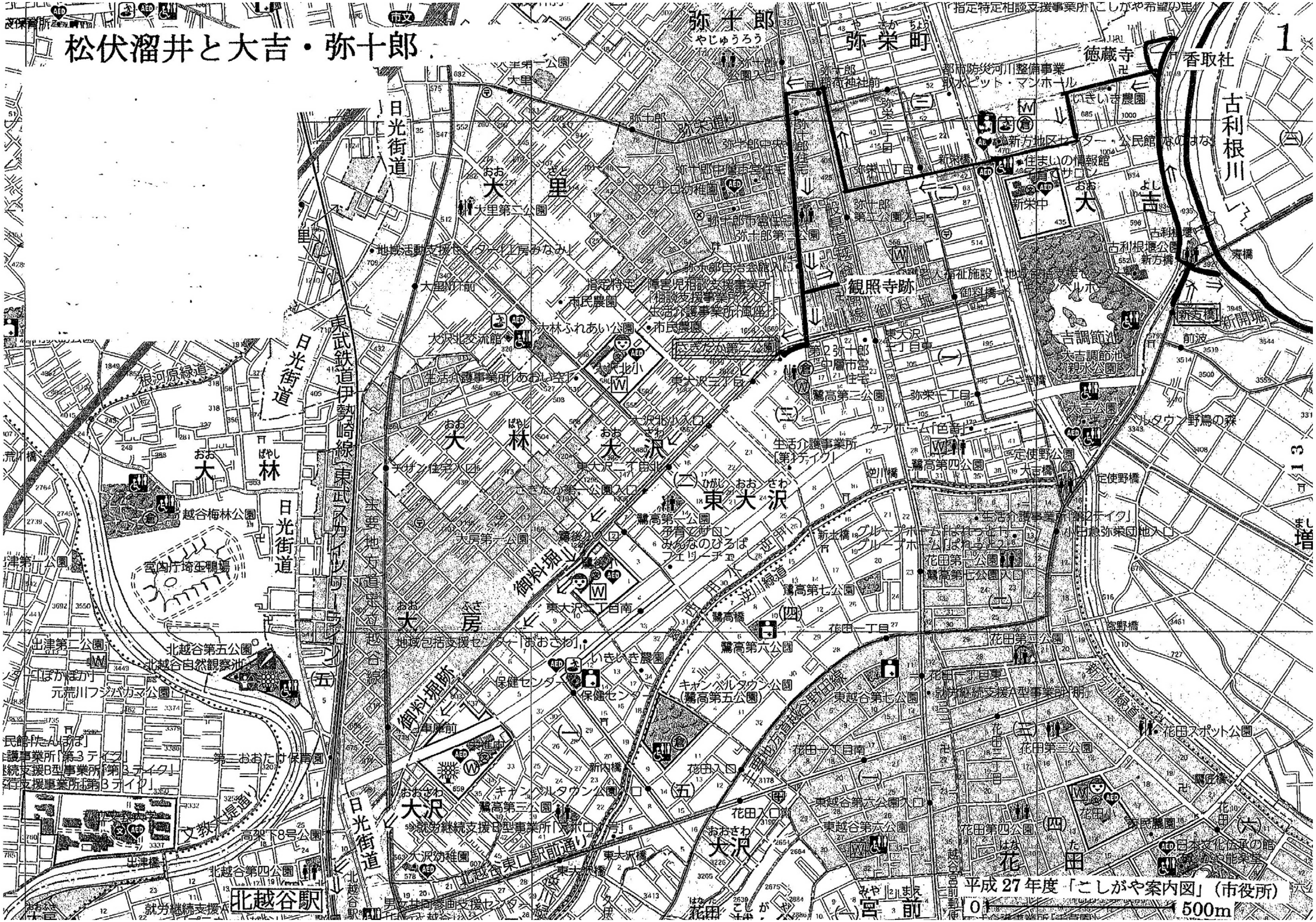
『大松村栄広山由緒著聞書』（栄広山清浄院所蔵）には、葛飾［郡］東（ひがし）新方領主である向畑城主の新方氏が崎西郡（きさいごおり）八条の領主八条氏との間で文亀四年（一五〇四）正月八日より始まる新方の地の支配をめぐる合戦が記載されている。向畑城は八条側に落ち、八条氏の支配となるが、永正十七年（一五二〇）には清浄院（しょうじょういん）住職高賢（こうけん）上人により取り戻すことになる。翌年にも双方の合戦がみられた。

なお、地元では「この地において新和（にいわ、現・岩槻市）の豪族と築比地（ついじ、現・松伏町）の豪族が争った所」との古老からの言い伝えも残っている。



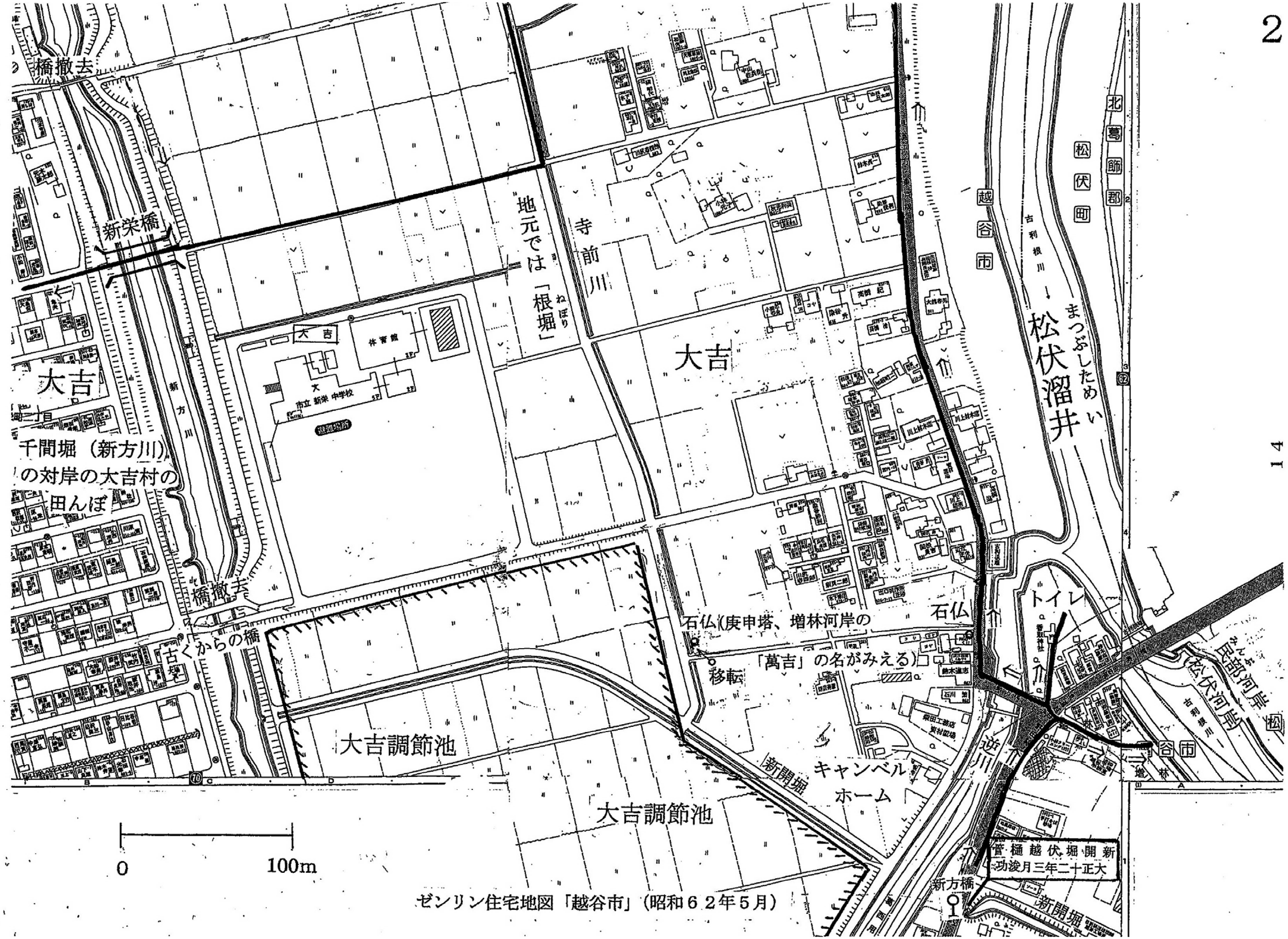
ゼンリン住宅地図「越谷市」2006年12月

松伏溜井と大吉・弥十郎


弥十郎
やじゅうろう
弥栄町
徳蔵寺
香取社
古利根川
大吉
大里
大林
大沢
東大沢
大房
花田
観照寺跡
御料堀
御料堀跡
日光街道
東武鉄道伊勢崎線（東武スカイツリーライン）
主要地方道足立越谷線
新方地区センター・公民館
大吉調節池
大吉公園
新方橋
新開橋
宮内庁埼玉鴨場
越谷梅林公園
北越谷駅
北越谷自然観察池
元荒川フジバカマ公園
文教大学
大沢北小
新栄中
増林
宮前

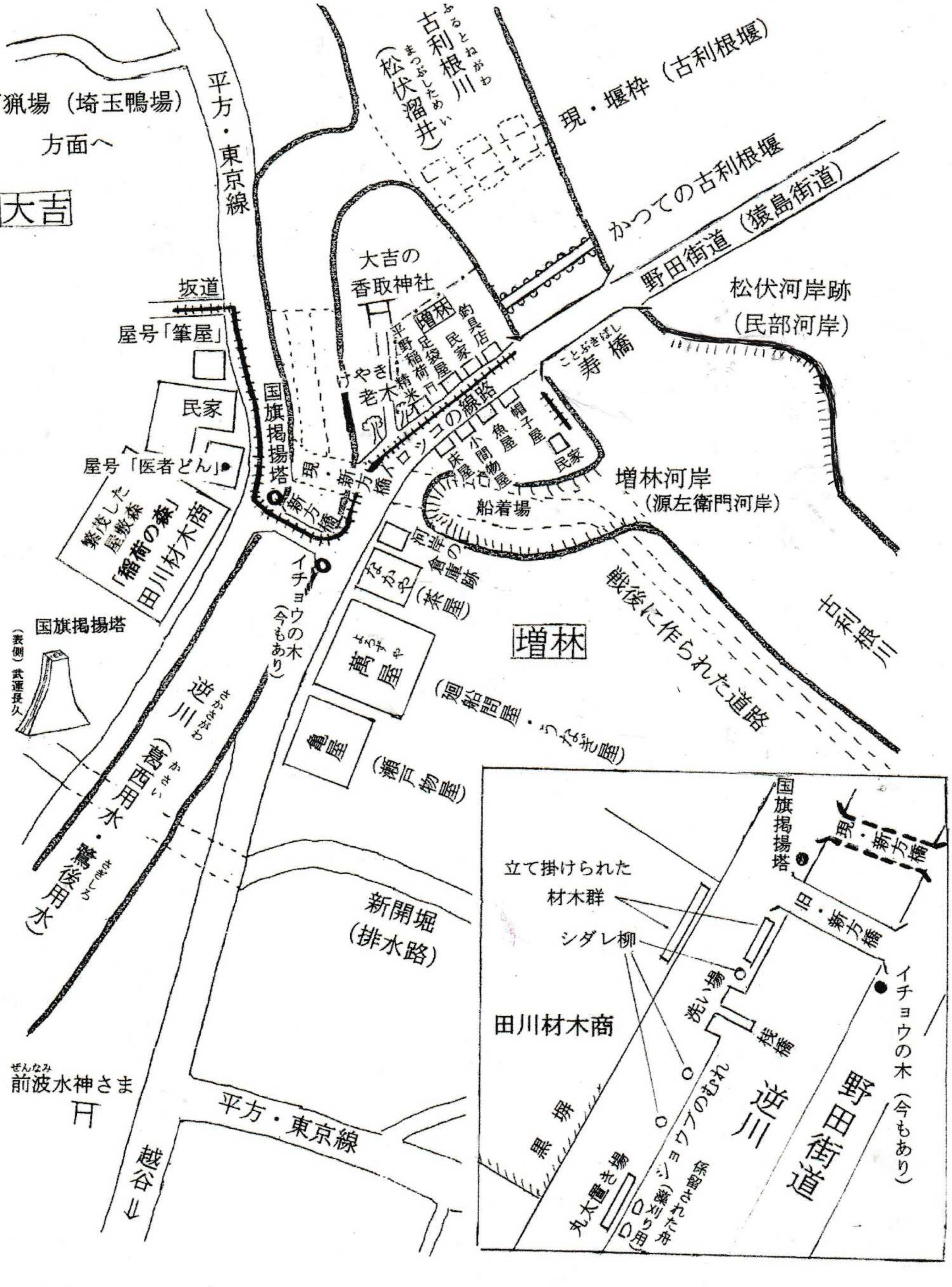
平成27年度「こしがや案内図」（市役所）

0 500m


橋撤去
新栄橋
大吉
千間堀（新方川）
の対岸の大吉村の
田んぼ
新方川
橋撤去
古くからの橋
大吉
体育館
市立 新栄 中学校
地元では「根堀」
ねぼり
寺前川
大吉
大吉調節池
大吉調節池
新開堀
キャンベル
ホーム
石仏（庚申塔、増林河岸の
「萬吉」の名がみえる）
移転
石仏
トイレ
香取神社
逆川
越谷市
古利根川
松伏溜井
まつぶしためい
北葛飾郡
松伏町
民部河岸
みんぶ
松伏河岸
古利根川
谷市
増林
松
新開堀伏越樋管
大正十二年三月竣功
新方橋
新開堀
0
100m

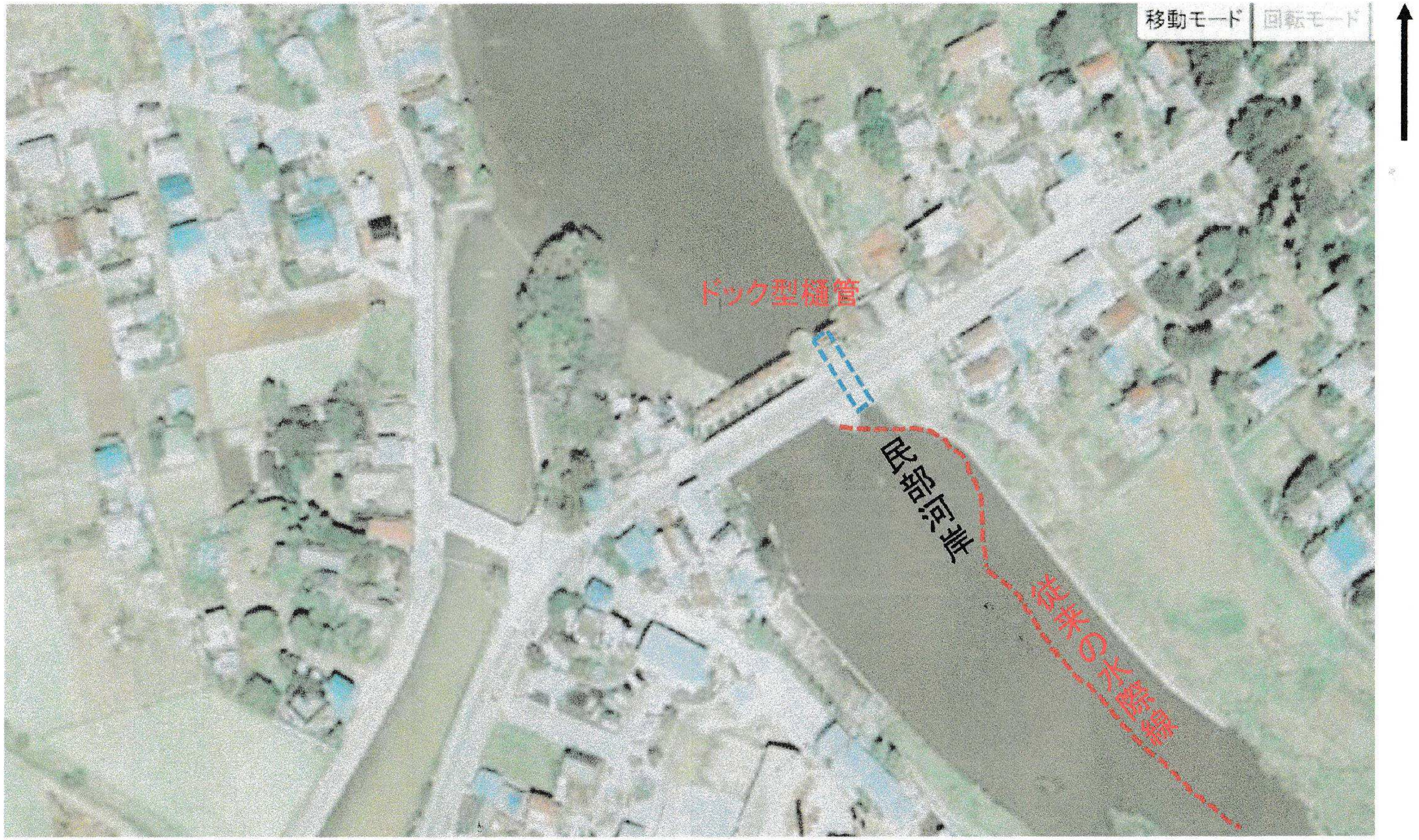
ゼンリン住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月）

増林河岸周辺図　（戦前）


ご猟場（埼玉鴨場）
方面へ
大吉
平方・東京線
古利根川（ふるとねがわ）
（松伏溜井（まつぶしためい））
現・堰枠（古利根堰）
かつての古利根堰
野田街道（猿島街道）
松伏河岸跡
（民部河岸）
寿橋（ことぶきばし）
大吉の
香取神社
増林
釣具店
民家
足袋屋
平野稲荷精米
けやき
老木
トロッコの線路
帽子屋
魚屋
小間物屋
床屋
民家
船着場
増林河岸
（源左衛門河岸）
坂道
屋号「筆屋」
民家
屋号「医者どん」
国旗掲揚塔
現・新方橋
新方橋
繁茂した
屋敷森
「稲荷の森」
田川材木商
イチョウの木
（今もあり）
河岸の
倉庫跡
なかや
（茶屋）
萬屋（よろずや）
（廻船問屋・うなぎ屋）
亀屋
（瀬戸物屋）
増林
戦後に作られた道路
古利根川
国旗掲揚塔
（表側）武運長久
逆川（さかさがわ）
（葛西（かさい）用水・鷺後（さぎしろ）用水）
新開堀
（排水路）
前波水神さま（ぜんなみ）
平方・東京線
越谷⇐
国旗掲揚塔
現・新方橋
立て掛けられた
材木群
シダレ柳
旧・新方橋
イチョウの木（今もあり）
洗い場
桟橋
田川材木商
ショウブのむれ
逆川
野田街道
畑
丸太置き場
（刈り取られた菖蒲）

排水樋管設置前後の様子

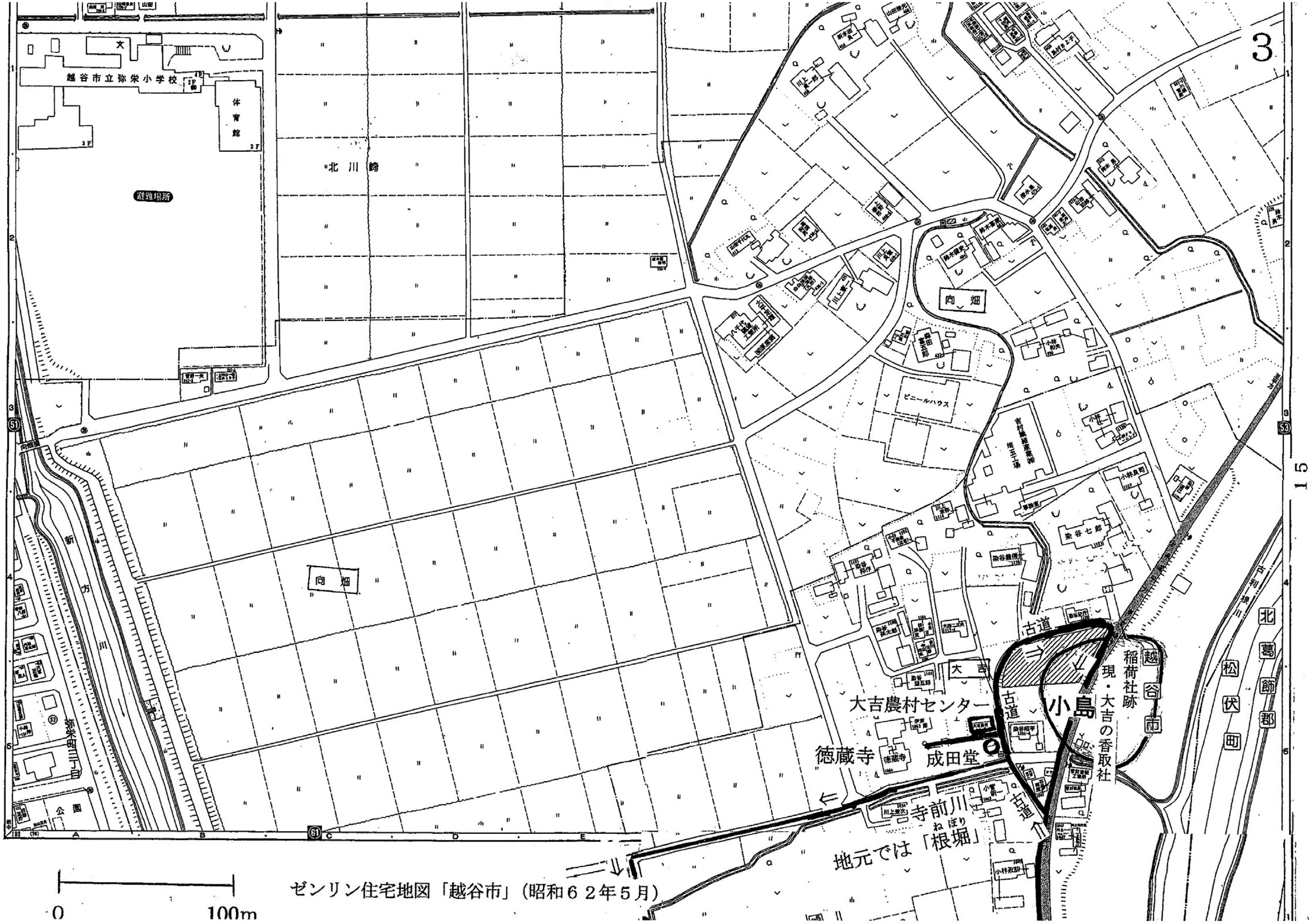
平成 30 年 8 月　鈴木恒雄氏作成


移動モード
回転モード
ドック型樋管
民部河岸
従来の水際線

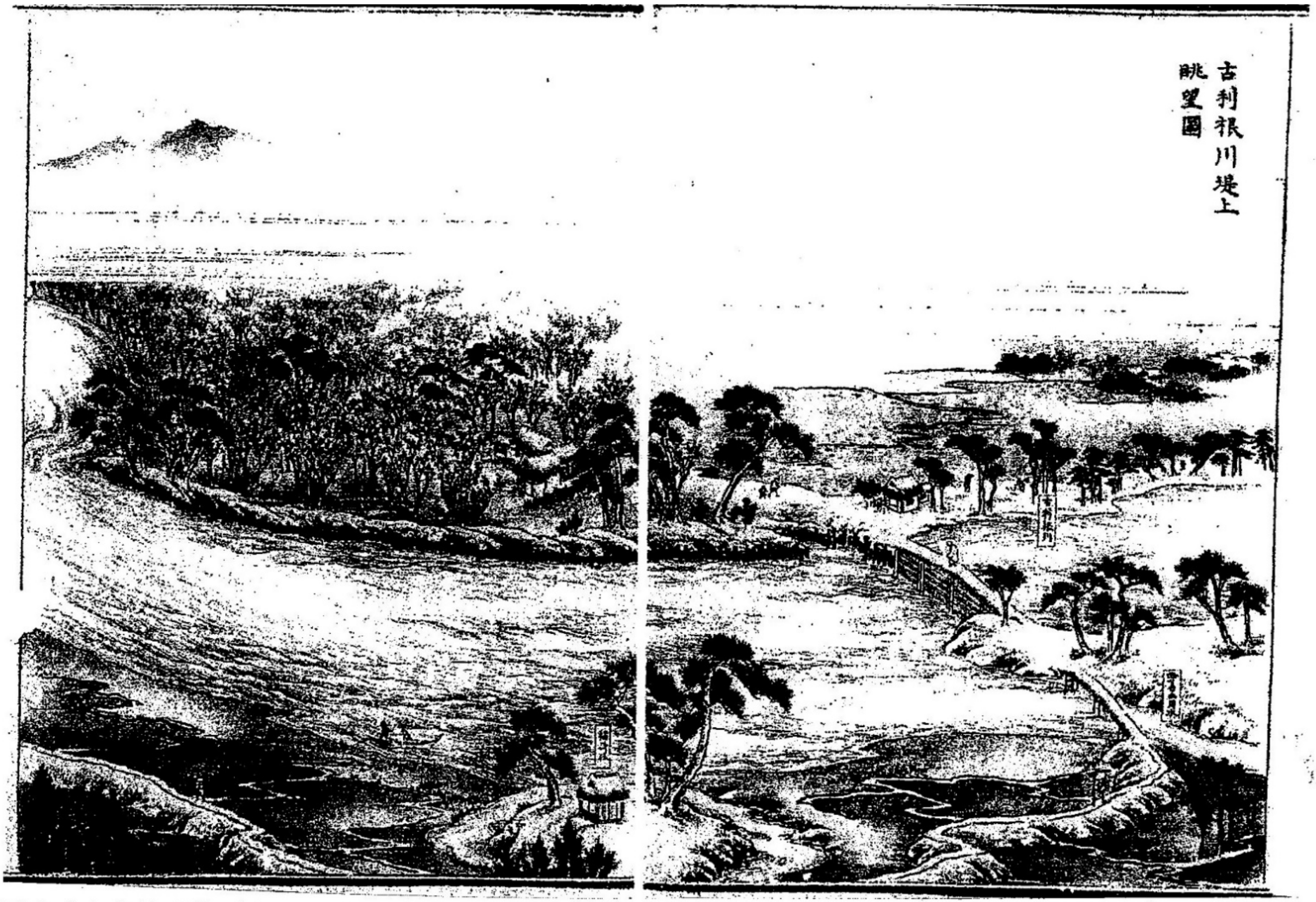
従来の民部河岸は、ドック型樋管設置の頃に、消滅し、左岸側水路も拡幅されたと考えた。

1979（S54）．10撮影　　ドック型樋管設置1965 (S40)　　国土変遷アーカイーブより

3


越谷市立弥栄小学校
体育館
文
避難場所
北川崎
向畑
新方川
弥栄町三丁目
公園
向畑
ビニールハウス
古道
古道
古道
大吉
大吉農村センター
徳蔵寺
成田堂
小島
稲荷社跡
現・大吉の香取社
越谷市
寺前川
地元では「根堀（ねぼり）」
北葛飾郡
松伏町
古利根川
15
0
100m

ゼンリン住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月）



国立公文書館所蔵（上記の図は、原田民自氏が国立公文書館において写真撮影版として入手したものである。）

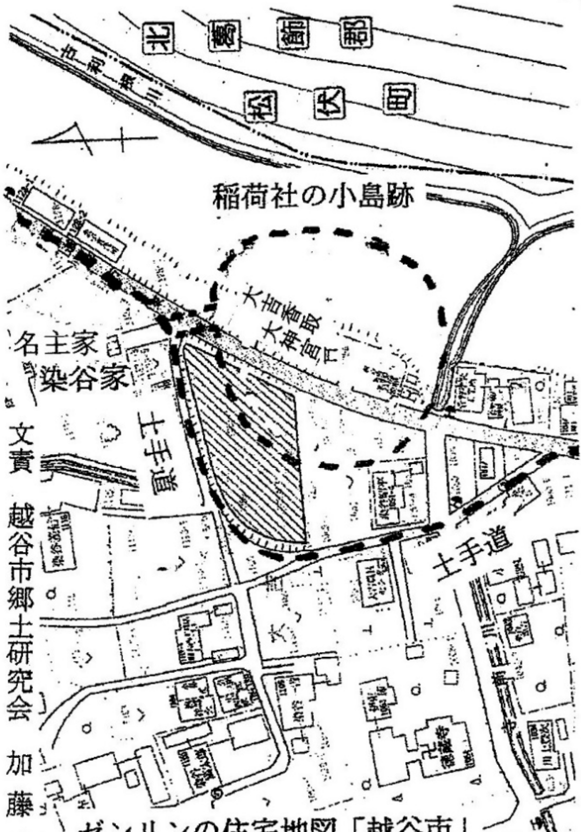
大吉村の稲荷社

上図は、新編武蔵風土記稿に添付されている「古利根川堤上眺望図」である。大きく描かれた川は、向かって左から右へと流れる古利根川である。その手前は、現在の越谷市大吉(おおよし)、対岸は砂丘が広がる松伏町である。対岸の中央には天神社(現在も当時の砂丘上にあり)が見られ、その北方は桃林が盛大に続いている様子が描かれている。

図中で、古利根川の下流に架かる橋は重り土橋（現、寿橋）で、向かって右端手前の水路は「西葛西用水」と書かれ、葛西用水である。向かって右端は、大吉村の香取社裏から古利根川に半島のように突き出た香取社（この図には出ていない）の土地である。

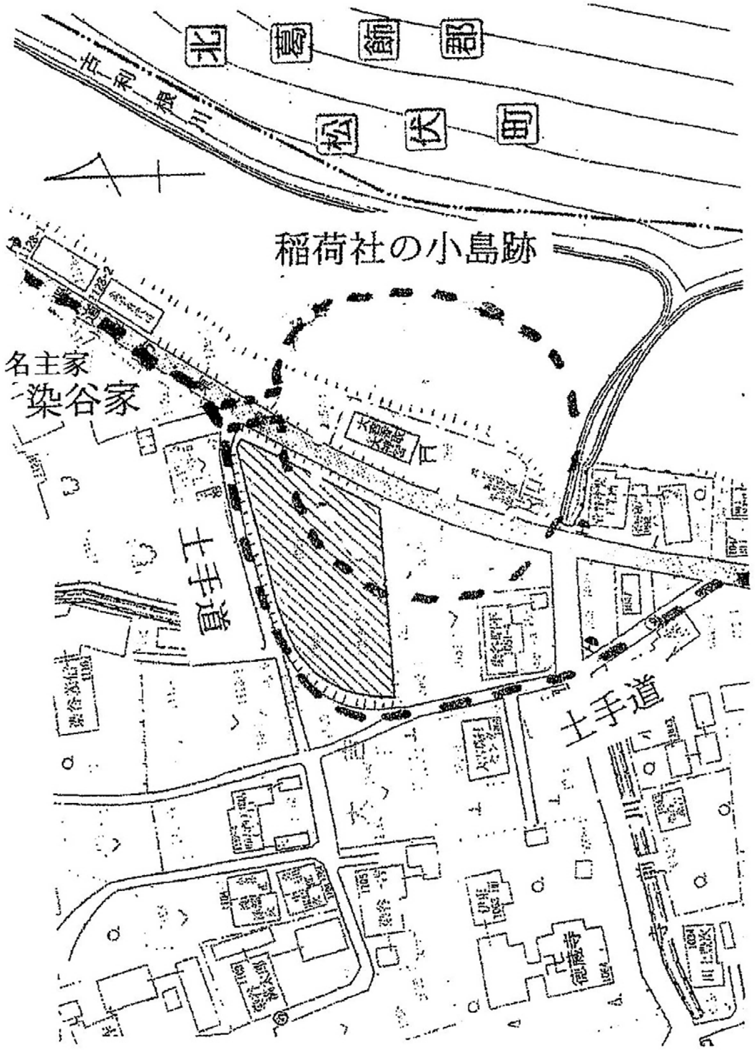
古利根川の河川敷の小島にある稲荷社（図の中央手前）は全く現存しないが、現在の大吉の香取社（葛西用水の左岸からここに移転してきた）のあたりに、江戸時代はあったのである。

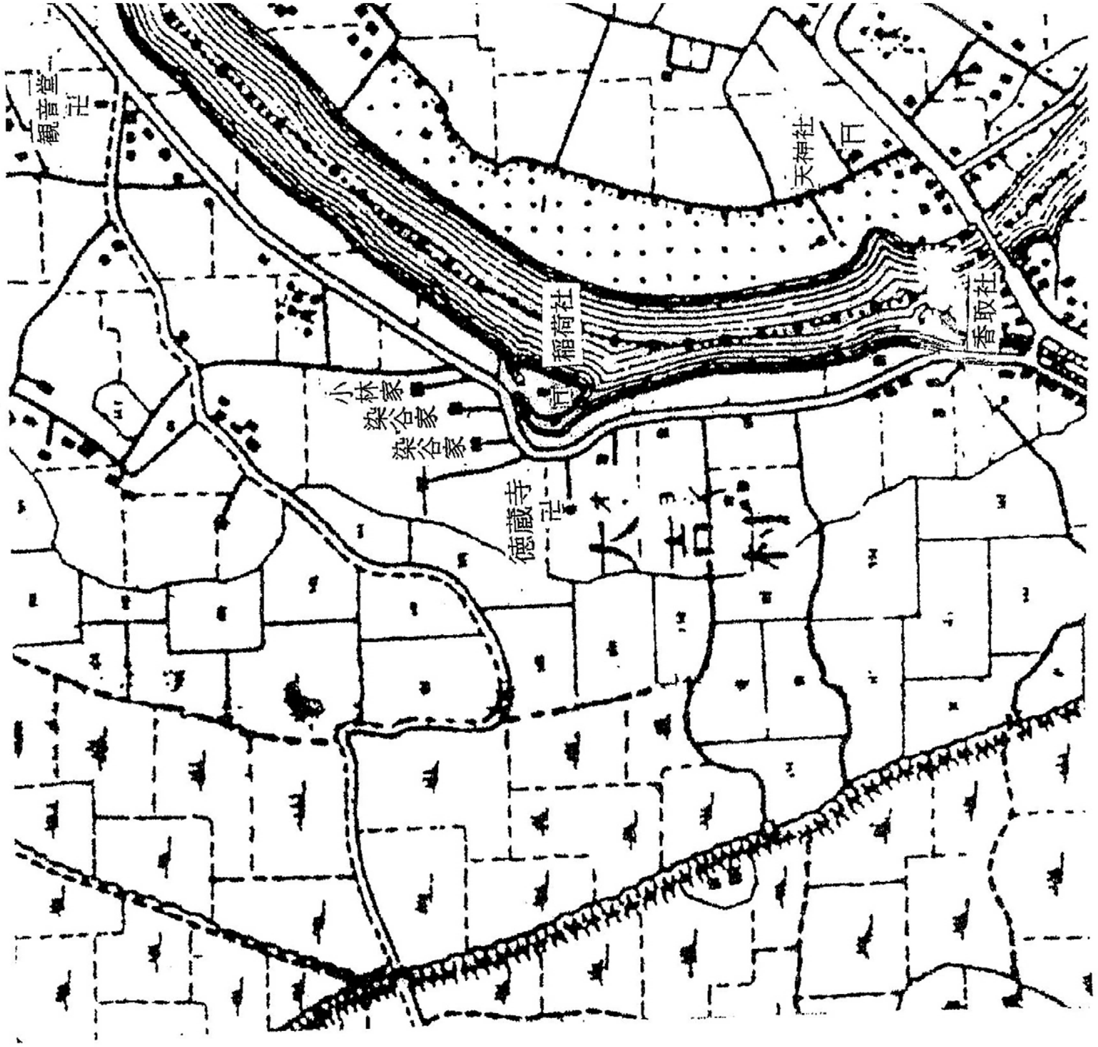
この稲荷社の手前陸地側には、ここには掲載されていないが、徳蔵寺がある。徳蔵寺に隣接する半円形の道筋の土手道は、古利根川沿いの古道であった。図では稲荷社の手前の小道がそうである。また、向かって左上遠方の山は、筑波山である。



ゼンリンの住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月発行）より

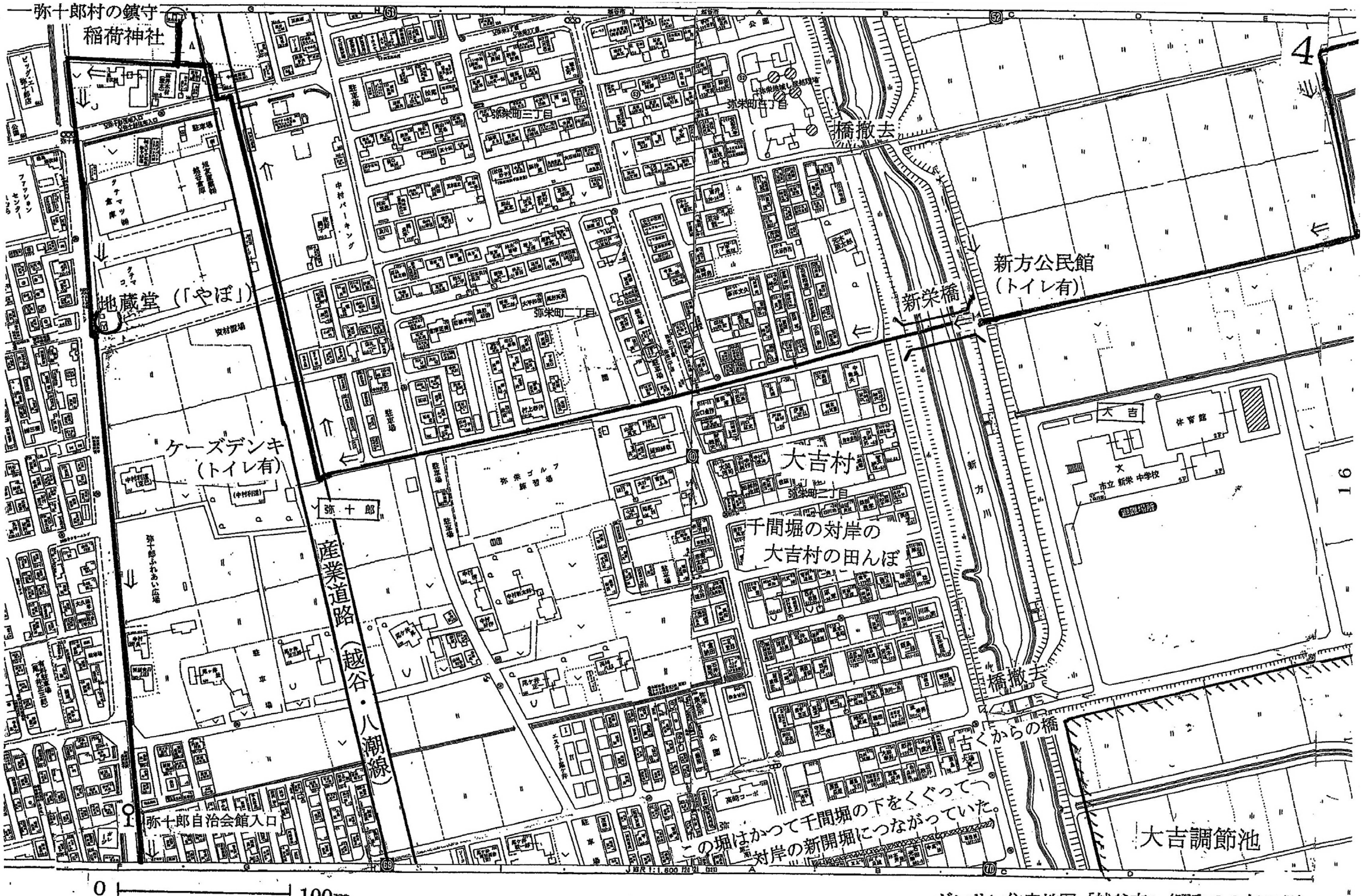
文責　越谷市郷土研究会　加藤幸一


北葛飾郡
松伏町
古利根川
稲荷社の小島跡
名主家
染谷家
土手下
土手道

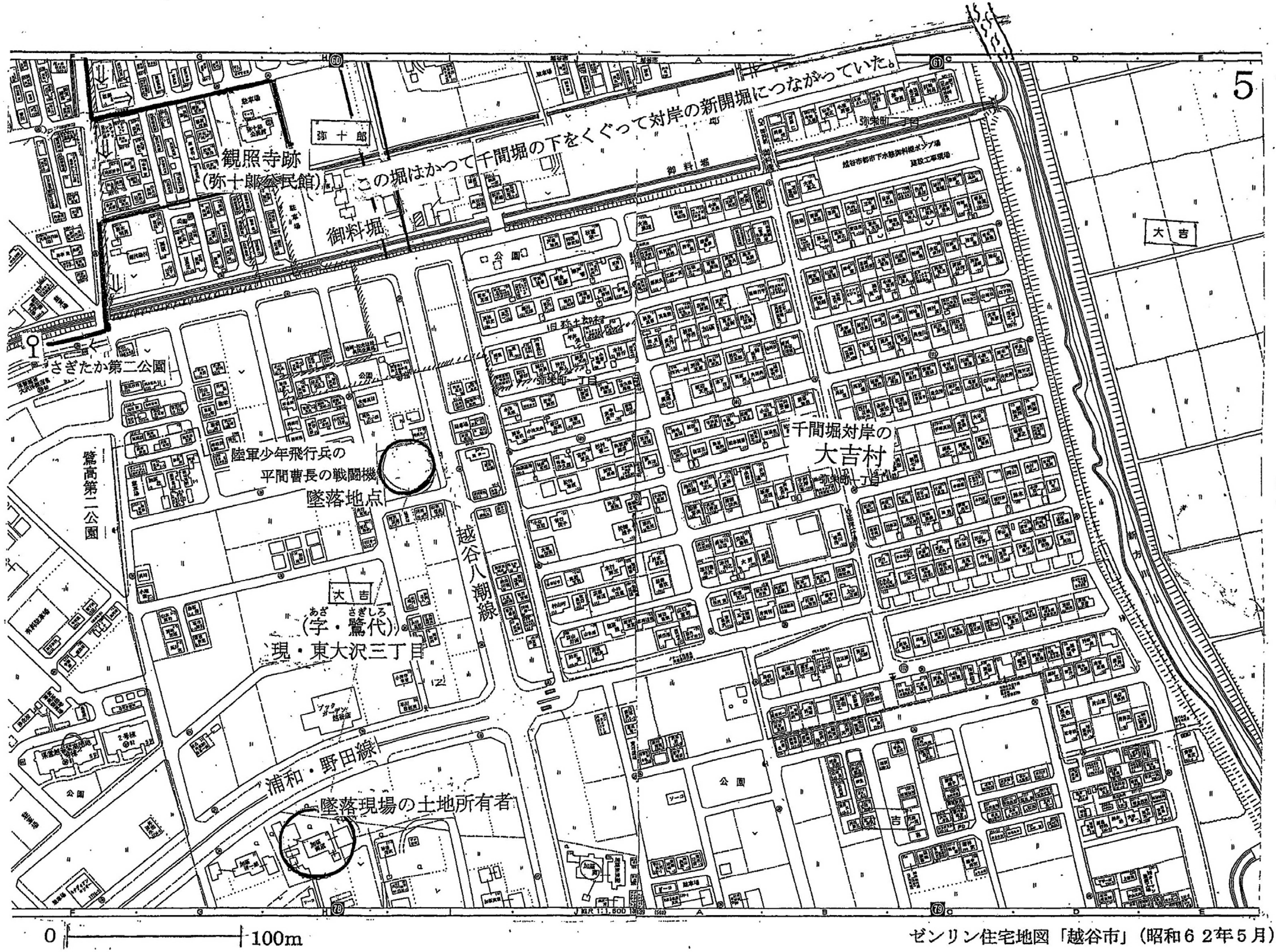

観音堂
天神社
稲荷社
香取社
小林家
染谷家
染谷家
徳蔵寺
大吉村

向かって右上の地図は、明治政府の参謀本部陸軍部測量局の陸地測量部が軍事上の必要性から近代的な測量技術を駆使して明治１３年に測量されて作製された地図の一部である。古利根川の中にある小島に神社が置かれ、道路からこの小島に渡る道があったことがわかる。この当時の神社は稲荷社である。

向かって左上の地図は、ゼンリンの住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月発行）に現代と当時の様子を書き込んだものである。
染谷家（江戸時代の名主の家柄）より稲荷社の小島に渡る道があったことを記載した。現在は稲荷社に変わって香取社になっている。


弥十郎村の鎮守
稲荷神社
4
地蔵堂（「やぼ」）
橋撤去
新栄橋
新方公民館
（トイレ有）
ケーズデンキ
（トイレ有）
弥十郎
大吉村
大吉
体育館
市立 新栄 中学校
新方川
弥栄町三丁目
弥栄町二丁目
千間堀の対岸の
大吉村の田んぼ
産業道路（越谷・八潮線）
橋撤去
古くからの橋
この堀はかつて千間堀の下をくぐって
対岸の新開堀につながっていた。
大吉調節池
弥十郎自治会館入口
0
100m

ゼンリン住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月）


5
観照寺跡
（弥十郎公民館）
弥十郎
この堀はかつて千間堀の下をくぐって対岸の新開堀につながっていた。
御料堀
さぎたか第二公園
鷺高第二公園
陸軍少年飛行兵の
平間曹長の戦闘機
墜落地点
越谷八潮線
千間堀対岸の
大吉村
大吉
大吉
あざ　さぎしろ
（字・鷺代）
現・東大沢三丁目
浦和・野田線
墜落現場の土地所有者
新方川
0
100m

ゼンリン住宅地図「越谷市」（昭和６２年５月）

大吉（おおよし）の香取神社跡や新方（にいがた）橋・増林（ましばやし）河岸周辺の歴史

１．戦前に宮さまが通ったルート

昭和１０年(1935)頃、昭和天皇の御兄弟の宮様が軍服姿で馬に乗り、付き人を連れて、赤岩（現・松伏町）方面から旧新方橋を通ってご猟場に向かった。宮さまが通る沿道の家々の家族は、道に出てお迎えし、頭を下げて通り過ぎるのを見送った。そのコースは、古利根川に架かる現・寿橋（ことぶきばし、当時の呼称は、「堰枠」）を渡り、葛西用水に架かる木造の新方橋（現・新方橋の１０メートル程下流）を渡り、田川材木商（現在無し）の屋敷の前の通りを右へ折れ、１２０メートル程北へ進み、そこから左折して田園を西に向かい、千間堀を越えて更に広大な弥十郎耕地（広大な田んぼ）を通過して、大林のご猟場（宮内庁埼玉鴨場）に向かった。乗馬姿の宮様のご猟場への通過は毎年春頃に見られていたようだ。

※宮様とは戦後に皇籍離脱した１１宮家と戦後も続く秩父宮（1902 生）、高松宮（1905 生）、三笠宮（1915 生）の３宮家があるが、坂本誠一郎氏によるとそのうちの習志野の騎兵連隊に属していた三笠宮ではないかと推測している。

※戦後の宮様の鴨場来駕のことではあるが、坂本誠一郎・中妻祐子両氏の川藤２７２の山崎様からの聞き取り調査によると「昭和３０年過ぎ頃、宮家の方とお供の方々が馬に乗られながら川藤・須賀（現・吉川市）を通られて越谷の鴨場へ行かれたと記憶している。３、４歳の頃だった自分は旗を振って歓迎しました。」とのことである。

※尾川芳男氏によると「昭和 30 年前後、馬に乗られた宮様らしき人物を含む 10 人位が増林の古利根川土手道（馬場の渡し付近）を吉川橋方面から大吉方面に向けて通られたのを幼いながら覚えている。多分、鴨場に向かわれていたのか。」

２．時代劇の撮影場所、旧・新方橋

現在の新方橋下流にあった木造土橋の新方橋は、その周辺からの眺めが非常によかったので、戦前から戦後にかけて時代劇の撮影場所としてよく使われていた。橋の上から下流側（南側）を眺めると、田川材木商の裏側はうっそうと茂る屋敷森（この森の中には、「稲荷さま」と「むじなさま」の祠があった。「むじな」とは狸をさすのか。江戸時代は「稲荷の森」と呼ばれた。）、その店の道路に面した倉庫に立てかけられた材木群や川（用水）沿いのしだれ柳、菖蒲のむれ、洗い場を兼ねた桟橋などが見られ、格別な風景だった。また、その反対の上流側方面は、香取神社の森や湖のように満々とたたえた古利根川の溜井、春には古利根川の対岸丘陵の桃林の満開の様子が見えて見事な眺めであった。なお新方橋は、江戸時代は「猿島往来橋」と呼ばれたようだ。（「郡村史」）

平成七年三月発行・越谷市「川のあるまち」第１３号の３６頁「橋の記憶」に詳しい。

３．大吉村の鎮守、香取神社の敷地

大吉村の鎮守、香取神社の敷地は、江戸時代初期までは大吉村と陸続きであった。江戸時代初期の寛永７年（１６３０）以降と思われるが、中島用水の開発の一環として現・葛西用水（鷺後用水、地元では「逆川」）が掘られ、大吉村の香取神社敷地（現在は古利根堰公園）は、大吉村と陸続きではなくなった。満々と水をたたえる松伏溜井もその頃にできたようだ。なお、香取神社参道の東側沿いは大吉と増林の村境で、野田街道の両側は増林の地である。

平成六年三月発行「川のあるまち」第１２号の３０頁「古木」に詳しい。

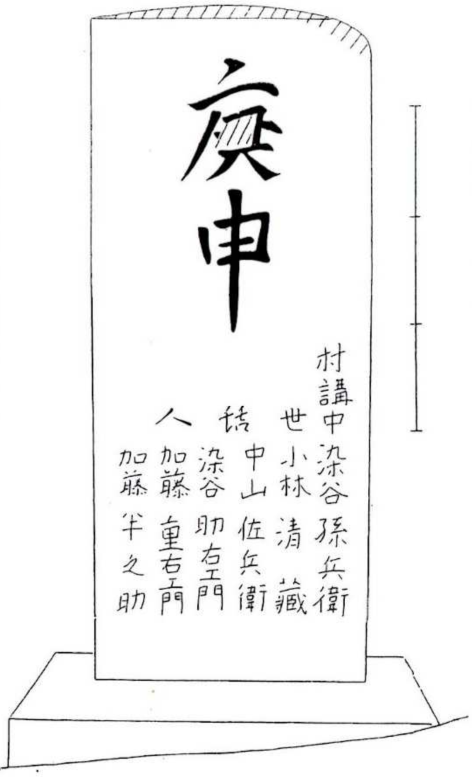
４．増林河岸（源左衛門河岸）

古利根川の寿橋５０ｍ下流地点から現在の新方橋方向に入り込んでいた水路（現在は道路に

変わっている）があり、この入り江は増林河岸（江戸時代の幕末まで差配していたのは、平野源左衛門、現在の増林３５００の平野家で、通称「ゲンゼム河岸」とも呼ばれた）の船着き場であって、そばの野田街道沿いはとても賑わいを見せたといわれていた。幕末ころからは廻船業を営む鈴木次兵衛の「萬屋（よろずや)」が増林河岸を取り仕切っていて、うなぎ屋や味噌醸造・酒屋も兼ねて経営し、多額納税者となっていたが、明治中頃に廃業した。「萬屋」の萬は祖先の名前、萬吉に由来しているという。

9・（大吉）文字庚申塔

大吉調節池東側路傍


庚申
村講中 染谷孫兵衛
世 小林清藏
話 中山佐兵衛
染谷助右ヱ門
人 加藤重右ヱ門
加藤半之助

9・文字庚申塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地　大吉・大吉調節池東側沿い路傍でT字路北東の角
石塔型式　頭部山状角型（南向き・高さは中）
年　号　天保三年（一八三二）

［左側面］
増林河岸　重右ヱ門
　　　　　源四郎
□□(八カ)
□□(紋蔵カ)
萬吉

［正面］
庚申
村講中　染谷孫兵衛
世　小林清　蔵
話　中山佐兵衛
　　染谷助右ヱ門
人　加藤重右ヱ門
　　加藤半之助

［右側面］
天保三壬辰□□吉日

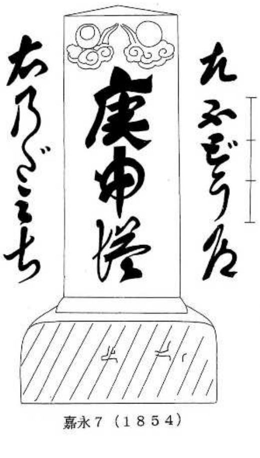
※増林河岸の萬吉は、幕末の頃から増林河岸の平野源左衛門家に代わって差配した鈴木家の「萬屋（よろずや）」の祖先である。

萬屋のウナギは、大相模の不動尊（大聖寺）への街道を通る参詣客が必ずと言ってよいほど立ち寄って食べていた店として有名であった。このあたりから寿橋にかけての沿道は店や民家が並んでいて、人の往来も目立っていたためか、「河岸通り」と呼ばれていた。

萬屋から野田街道を南に４５０メートル進んだところに、東流する増林用水路（「かけい堀」）とそれに沿った道がある。野田街道から分かれるその道の南側角地に「左ふどう道」と「右のだみち（野田道)」と刻まれた庚申塔の道しるべがあった。野田街道から用水沿いに入る分れ道は、当時の大相模の不動尊に向かう近道であったという。この道しるべは、ここから東に１００メートル先に行った角地に移転している。

また、この交差点の南側一帯には清涼院（せいりょういん）という寺院があった所でもある。

道標付き文字庚申塔


左ふどう道
庚申塔
右乃だみち

平野家［増林一一七〇］そば十字路

嘉永７（１８５４）

なお、次兵衛の息子は県会議員になっている。増林河岸の対岸の現・寿橋のたもとには松伏河岸（民部河岸、松伏村の名主である石川民部が差配していた）があった。

【参考】「増林河岸の跡」

野田街道と古利根川が交差する寿橋から越谷寄りに凡そ五十メートル程の街道の北側に老木が二本立っている。ここはかつては大吉の香取神宮の参道入口だった所である。

昔はこの大木前の道路を挟んで反対側に水路が見えていた。寿橋下流凡そ五十メートル右岸にあった入江から水路が街道家並みの裏側を迂回して道路際まで入り込んでいたのである。

この水路はかつての古利根川水運の増林河岸（源左衛門河岸）の船着場の跡だったという。

戦前頃の記憶であるが、当時の水路は既に街道から傾斜して埋め立てられ、昔在ったであろう荷揚げの階段等、河岸場らしき跡は無くなっていた。イチジクの木が二、三本あり、ゴミも捨てられていた状況だった。その先の古利根川よりの水路は、真菰や芦が生えて沼地になっていて、所々に往時の護岸用か何かの杭が朽ち果てて僅かに頭を出していた。水路の南東側方面は畑や田んぼで、遠く増林の屋敷森まで見透かせた。近くの古利根堰の水門が時々開いて放水されると、堰の下流が増水してこの水路まで入り込んだ。このときは水流でこの沼地は活気づき、漁師の川舟も入って繋留されていたが、普段は全く寂れた所になっていた。

『越谷市史』には、明治中頃の調査によると、古利根川の川底が既に浅くなっていたことや、粕壁からの高瀬舟（途中に立ち寄る河岸場、河岸場で物資が積み込まれてきたので、地元では合船[あいぶね]と呼ばれた）でのこの河岸場への出入りが年間三十五回、米麦三千八百二十俵、大小豆百四十八俵、などとその当時の活動状況が記されている。

その後、古利根川の水運は鉄道や道路交通の発達により急速に衰退し、増林河岸も時代の変遷とともに姿を変え、現在は埋め立てられて道路や住宅地と化し、河岸場の面影は全く見られない。昭和３０年頃のことである。

平成十一年度・越谷市民文化祭の展示部門出品紹介の「増林河岸の跡」より抜粋

平成四年三月発行・越谷市「川のあるまち」第１０号の１４２頁「増林河岸場の跡」に詳しい。

５．古利根堰

現在の古利根堰は、当初は寿橋の位置に木製で構築された。古利根川に一定の水量を貯留する松伏溜井を保持するものである。しかし、川幅(10間)」が広いので、大量の木材を使用する程に水上に浮き上がってしまうため、水圧や浮力に耐える機能を備える必要から、高1丈1尺の堰上に幅3間・長12間の枠組みを拵え、其所に大量の土を被せ、且つ其の上を通行できるようにしたことから「重(かさな・おも？)り土橋」と称された。

（以上、大谷達人氏、参考文献：大正13年「葛西用水路沿革史」、「日本歴史地名体系１１」平凡社）

一方、古利根堰は重り土橋（現在の寿橋）のすぐ上流に大正10年(1921)に並行した鉄骨造りの堰として建造された。堰の大きな扉（木製）の上下開放は、手動の巻き上げで行われた。上流の古利根川(松伏溜井)の水をこの堰で堰き止めていた。

堰枠の建造にはすぐ近くの多くの人足（地元の農家）をかかえて土木建設も兼ねていた材木商の田川家が携わっていて、その工事のために設置されていたと思われるトロッコの線路が昭和初期まで残っていた。これは、現在の寿橋たもとから野田街道の香取神社側を通り、

かつての新方橋を渡り、民家側を北に進んで５０ｍ先を左折していた。その他に道路を挟んで寿橋の東側角地にもみられていた。これらは護岸工事に使う土の運搬のためにトロッコの線路を設置したものであるといわれ、土の採取場所は筆屋の西方の地であった。その後、田川家の敷地内に不要となった多くのトロッコが積まれて放置されていた。

現在は、この堰に代わって、さらに上流の地点、葛西用水の取水口の先に現代的な新堰枠ができている。これは昭和６１年に地盤沈下対策として旧堰に代わって新造されたものである。

※「重り土橋」の読み方は「葛西用水史」の 385 頁に「通称重なり土橋と称した」との文面が見られるが、「かさね」土橋ではなく「かさなり」とするのは呼称として不自然である。「かさね」とするのが自然である。それゆえ堰枠が浮き上がらないようにその上に「重し」をしたことから、加藤は「おもり」土橋と読むのではとの疑問を拭い去れない。

６．新開堀

新開堀は、古利根川へ現在でも流れ注いでいる。かつては新開堀の上流では千間堀や逆川の下をくぐって流れていて、この堀はこのあたり一帯の排水機能として重要な排水路となっていた。新方橋バス停そばにある野田街道の新開堀の伏越の樋管は大正１２年３月に完成しているので、新開堀はこの時に開通したのであろう。

７．野田街道（猿島街道）

越谷市内の大沢から地蔵橋、さらにその先の寿橋を渡って野田方面に行く道は、野田街道（猿島街道）と呼ばれ、戦後は国道１６号線として利用されたこともあった（昭和５０年の野田春日部バイパス完成まで）。明治末から大正にかけては、大沢（当時の越ヶ谷駅、現在の北越谷駅）から現在の寿橋を渡り、「堂面渡し」のそばを通って野田の手前の金杉（現在の野田橋の上流１００ｍ先の江戸川べり）まで「テト馬車」（馭者が鳴らすラッパの音「テートーテートー」に由来）と愛称された乗合馬車が通っていた。

野田の手前の江戸川に架かる野田橋は昭和３年（１９２８）１月に初めて木造の橋が作られたが、昭和１１年７月に落下し、昭和１８年に鉄筋コンクリートの橋となる。その後、昭和３８年（１９６３）１２月３１日に３代目の現在の橋となっている。

平成五年三月発行「川のあるまち」第１１号の２５頁「野田街道の九十年」に詳しい。

８．「なかや」

「なかや」と呼ばれた茶店（茶屋）は、河岸場に出入りする者や、附近の人たちの休憩場所であった。土間の縁台で茶菓子やカキ氷などを食べていた。敷地内には座敷を備えた別棟もあった。

９．河岸場の倉庫跡

この茶屋の北隣は、源左衛門家が所有していた河岸場の草葺き屋根の倉庫の名残が今でも残っている。現在は赤いトタンの屋根に変わっている。

附記：この記録は越谷市発行「川のあるまち」への投稿及び市民文化祭展示部門へ出品した鈴木進志氏のご協力を得て作成いたしました。　平成２８年１０月１０日　加藤幸一

大吉の古老から聞いた戦前の軍人による市街戦や渡河の軍事訓練、その他

１．戦前の軍事訓練―河岸通りでの市街戦―

太平洋戦争が始まる前の、支那事変下の頃である。昭和十三・四年頃、松伏堰の下流側（地元では下河岸・したっかしと呼ぶ）には水量が少なく、河原ではほとんど長い草は見られなかったので、春頃であろうか。どこからともなく兵隊さんを満載にしたトラックが対岸の松伏側にやってきた。そして古利根川を挟んで、松伏（上赤岩・かみあかいわ）から増林（ましばやし）にかけて、現地での軍事訓練が始まったのである。おそらく、午前中のことだったであろう。

先ず、松伏側から敵が増林側に進出しようとして、河岸通り（現在の寿橋の手前の野田街道、そばに増林河岸があった）にて市街戦を繰り広げたのである。敵は堰枠の橋（現在の寿橋）の上を腹ばいになって「ほふく前進」して渡って来る。その敵を応戦するために、大吉の鎮守の香取神社境内（現在は古利根堰公園）に味方の多くが潜み（ここが本部か）、河岸通りの家や店の隙間に隠れ、或は新方橋を渡った国旗掲揚台や物陰に隠れ、パンパンと鉄砲を撃っていた。そして河岸通りに両軍が互いに進んでくると、その道路の所々で爆発が起きた。多分、鉄砲か手榴弾か何かをまねた花火などの火薬であろう。煙が周辺に充満する中で両軍の市街戦は暫く撃ち合っていたが、河岸通りの中央で両軍が衝突し合ったところで訓練は終了した。

２．戦前の軍事訓練―古利根川での渡河（とか）訓練―

市街戦の軍事訓練が行われた午後のことだと思う。堰枠の橋（寿橋）の下流150m程での松伏側（上赤岩）の河原から増林側の河原への渡河訓練の様子を橋の上から大勢の人々が初めから終わりまで見学していた。

鉄砲を持ち重装備した数十人の兵隊さんが中央に流れる浅瀬の川を相互の間隔を取りながら水の中を歩いて渡っていった。対岸の増林側の河原の砂原に到着すると、次に引き返して松伏側の河原に戻っていた。

そのような中で、橋の上で見学中の誰かが「兵隊さんがおぼれた」との声があがった。増林側に向かっていた兵隊さんの一人が、深みにはまっておぼれたのである。周辺の兵隊さんたちがおぼれた兵隊さんの周囲に集まり、水中から引き上げた。そして、松伏側の陸地に上げられた。多分、亡くなられたようである。その後なぜか兵隊さんの一群は何時間も河原にとどまっていた。そして、ようやく陸地に上がってトラックに乗ってすべての兵隊さんが引き揚げて去った。

３．この渡河訓練をした河原は時代劇の映画の撮影場所

この渡河訓練をした堰枠の橋の下流の河原は時代劇の映画撮影場所としても利用された所であった。松伏側の河原で多くの侍が集まり、ここで刀を抜きチャンバラをして合戦をしていたのを橋の上から見物した記憶がある。

４．逆川（さかさがわ）の土左衛門（どざえもん）

逆川に土左衛門（溺死人の膨れ上がった死体）が流れていたことがあった。土左衛門が古利根川の上流から流れてくると、この橋の堰枠があるために下流へは流れずに、堰の手前の逆川に流れ込んで下っていったのである。その流れている土左衛門を見学しようと大勢の野次馬が集まって騒いでいた。この人々の中に後日、徴兵を拒否して煙突の中で首つり自殺をした男性が囃し立てていたのを覚えている。

５．徴兵拒否の話

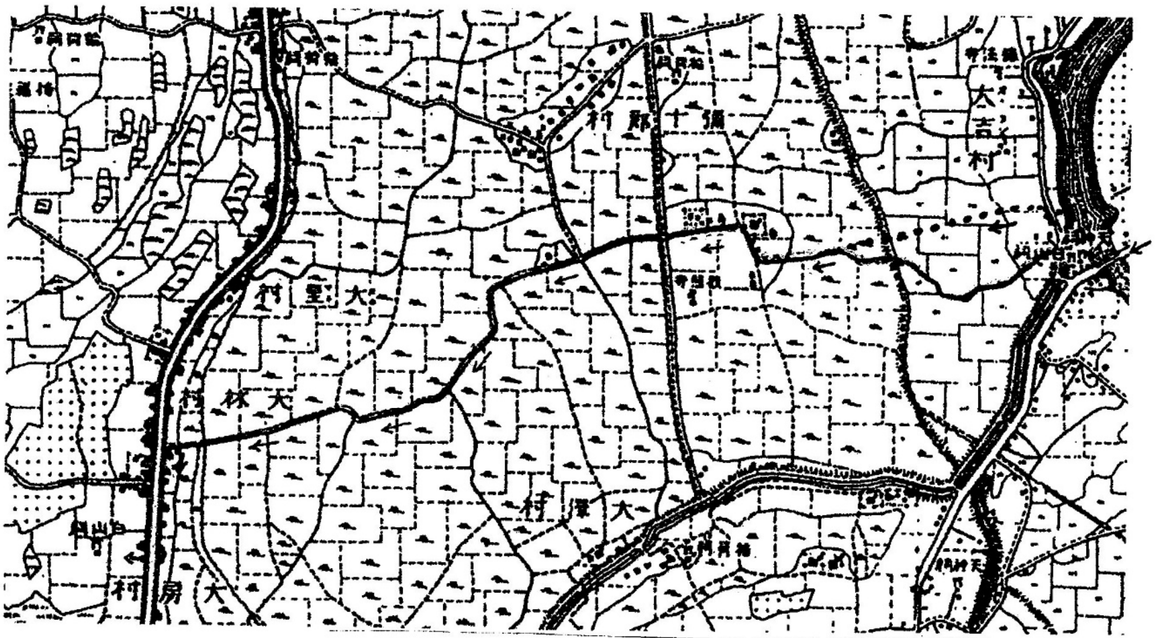
松伏の男性が、徴兵されて軍事訓練を勤め、途中休暇を取って自宅に戻ってきたが、徴兵期間中で再び軍務に復帰する日が来ても、徴兵を拒否して逃亡した。村中の人々が探したが発見できなかった。すると、その男性の家の祖先の墓地（松伏）に軍服や帽子が置かれているのを発見し心配されていた。

その後、偶然にも地元の醤油工場の煙突のてっぺんに紐が垂れ下がっているのを工場の人が気づき、不思議に思って様子を見に煙突に登ってみると、煙突の中に首を吊ってぶら下がっている人を発見した。それが逃亡した男性とわかる。するとそのうわさがあっという間に村中に広がり、煙突の周りの広場にはものすごい数の野次馬が集まった。その男性は既に亡くなっていた。

Ｈ２９・１・１４　加藤幸一

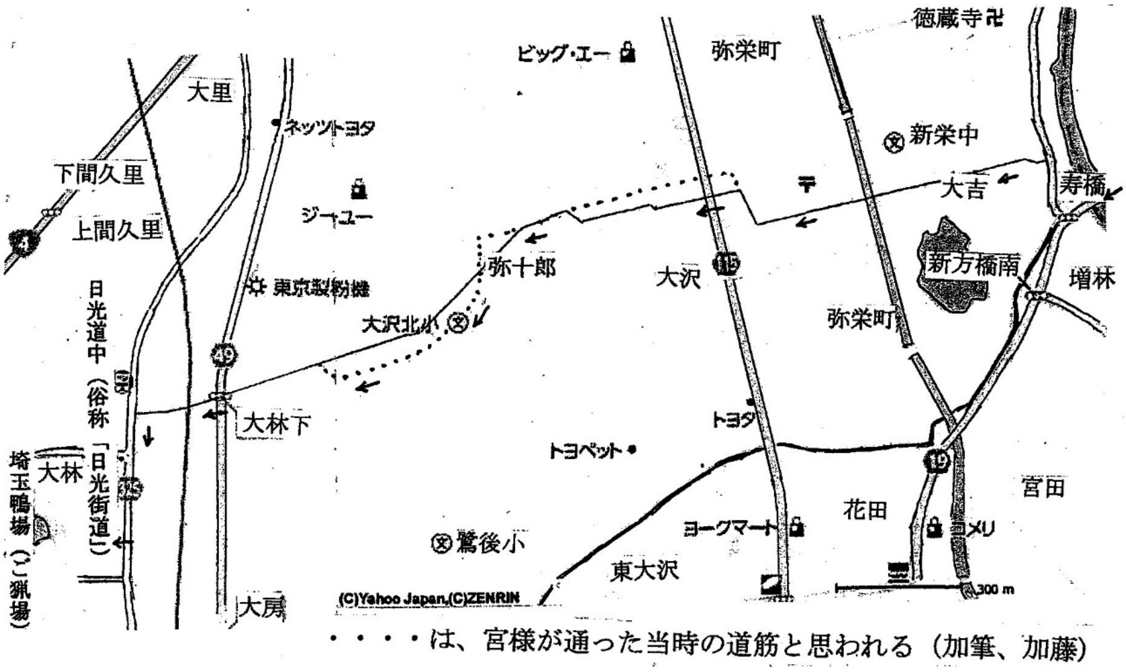
大吉から弥十郎耕地を通って日光道中（俗称「日光街道」）に至る古道

（明治１３年測量の迅速測図）


彌十郎村
大吉村
大里村
大林村
大澤村
大房村

・・・・は、宮様が通った当時の道筋と思われる（加筆、加藤）

現代の道路にあてはめてみた
宮様が大吉を通ってご猟場に行かれた時のコース


徳蔵寺
ビッグ・エー
弥栄町
大里
ネッツトヨタ
新栄中
下間久里
ジーユー
寿橋
大吉
上間久里
新方橋南
増林
弥十郎
大沢
東京製粉機
大沢北小
弥栄町
49
115
大林下
トヨタ
トヨペット
19
宮田
大林
花田
ヨークマート
コメリ
鷺後小
東大沢
大房
(C)Yahoo Japan,(C)ZENRIN
300 m
日光道中（俗称「日光街道」）
埼玉鴨場（ご猟場）

・・・・は、宮様が通った当時の道筋と思われる（加筆、加藤）

弥十郎地区や大沢北小学校周辺の道は大きく変わっている。　　作成者　坂本誠一郎氏

坂本誠一郎氏の調査によると、大吉を通って宮内省(現・宮内庁)埼玉鴨場の御猟場に行啓されたと思われる「宮様」は、戦後に皇籍離脱した１１宮家と戦後も続く秩父宮・高松宮・三笠宮の３宮家がおられ、秩父宮様は弘前市の陸軍歩兵隊に、高松宮様は呉市の海軍に、昨年亡くなられた三笠宮様は習志野の陸軍騎兵連隊に属していたという。

特に３宮家に絞って考えると、三笠宮の距離的・地理的可能性、当時のご年齢及びご要職、並びに騎兵科ご入学、そして第四皇男子という家庭的環境面などの要因から総合判断すると、大吉を通って埼玉鴨場に行かれた宮様は、騎兵連隊に属していた三笠宮親王のような気がすると推測している。

1901

明治34年秋山千畝画　松伏溜井図

～葛西用水路土地改良区蔵～

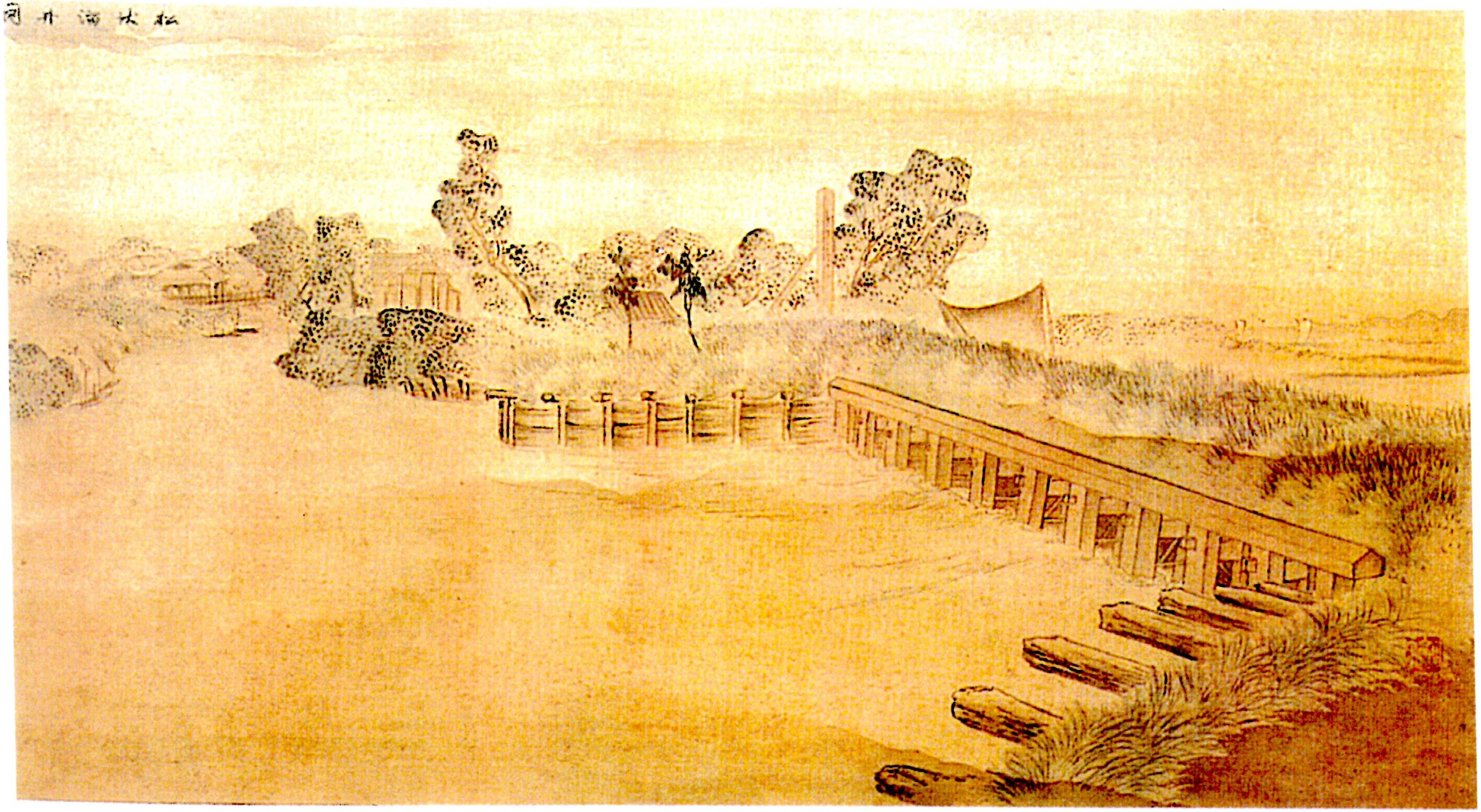
浪除石垣　・水流激しい処の舟入場の仕立て

　　　　　・松又は栗木を打ち違い継いの横木を挟み土台を作りその上に石を据える

・関東平坦地では、一般に土出し、杭出し(乱杭)で水刎を為す

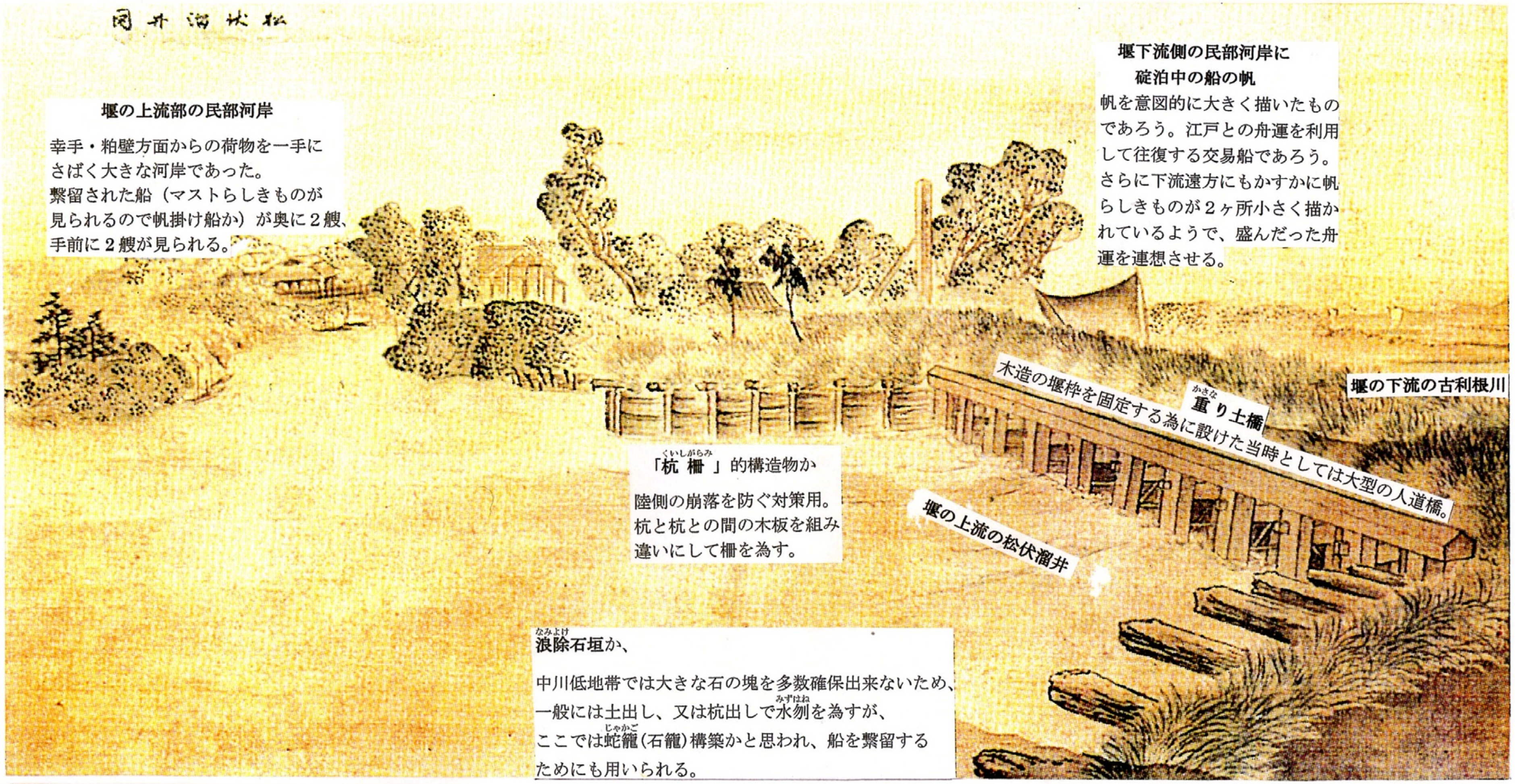
　～川表の三方は萱羽口にて包み並べ杭を打つ

杭柵(くいしがらみ)杭と杭の間に木板又は竹で組違いに柵を作る



明治34年「秋山千畝（せんぽ）画松伏溜井図（まつぶしためいず）」（葛西用水路土地改良区蔵）

図中の解説文は大谷達人（たつを）氏



堰の上流部の民部河岸

幸手・粕壁方面からの荷物を一手に
さばく大きな河岸であった。
繋留された船（マストらしきものが
見られるので帆掛け船か）が奥に２艘、
手前に２艘が見られる。

堰下流側の民部河岸に
碇泊中の船の帆

帆を意図的に大きく描いたもの
であろう。江戸との舟運を利用
して往復する交易船であろう。
さらに下流遠方にもかすかに帆
らしきものが２ヶ所小さく描か
れているようで、盛んだった舟
運を連想させる。

堰の下流の古利根川

重（かさな）り土橋

木造の堰枠を固定する為に設けた当時としては大型の人道橋。

堰の上流の松伏溜井

「杭柵（くいしがらみ）」的構造物か

陸側の崩落を防ぐ対策用。
杭と杭との間の木板を組み
違いにして柵を為す。

浪除（なみよけ）石垣か、

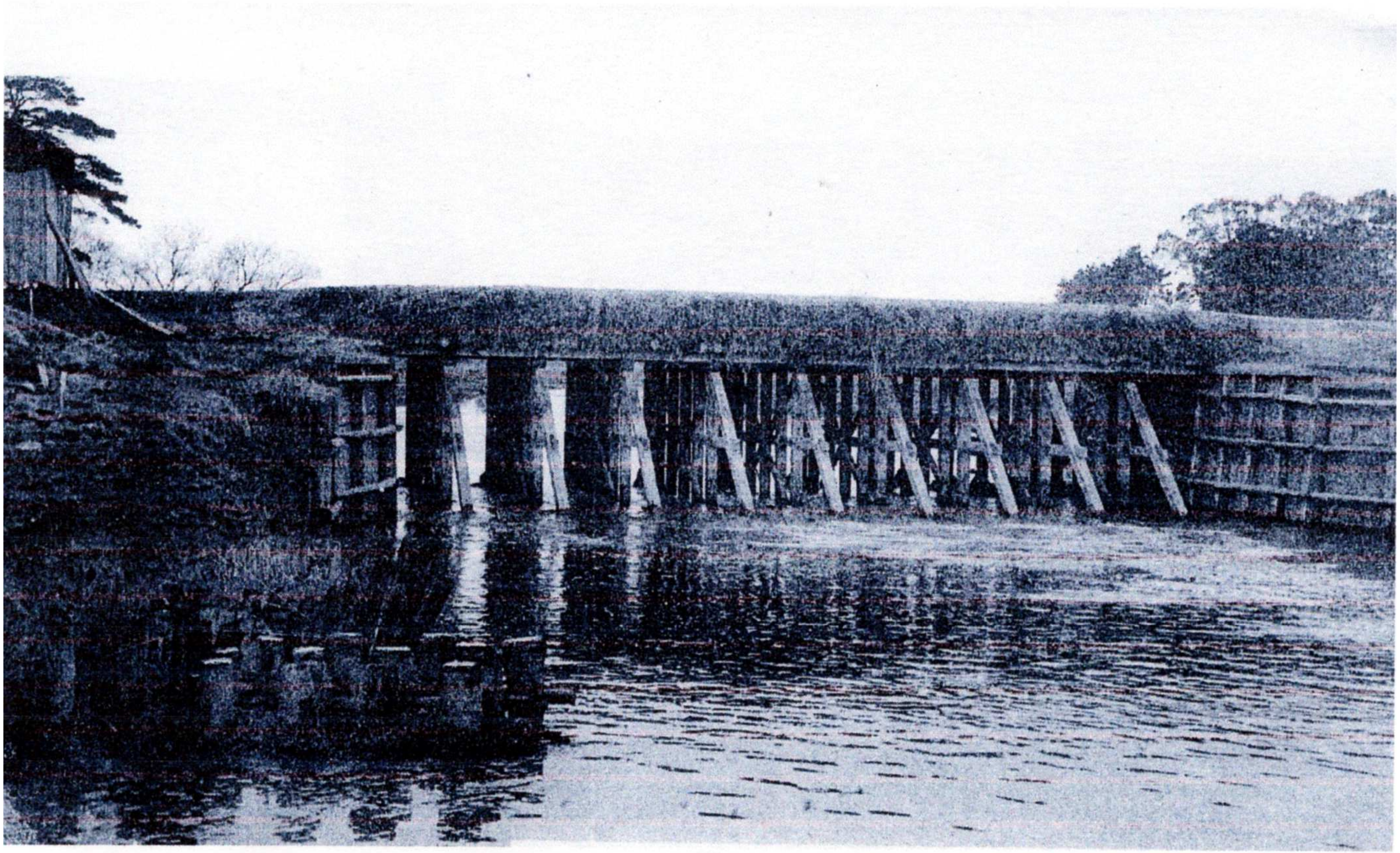
中川低地帯では大きな石の塊を多数確保出来ないため、
一般には土出し、又は杭出しで水刎（みずはね）を為すが、
ここでは蛇籠（じゃかご）（石籠）構築かと思われ、船を繋留する
ためにも用いられる。

※「上記の堰が築造された当初は、東側に松伏に接するものと、西側に増林に接するものの２堰があり、古利根川のこの部分は東西二条に分かれて流れていた。両堰の間は中州状の島によって繋がっていた。しかし、寛保２年(1742)の大出水で松伏側の堰は大破したため修復されず廃止され松伏側は土盛りされて陸地となり、増林側のみが翌年に細川越中守の手伝い普請で完全修復される。その後も度々の改修を経て今日に至る。」（大谷達人氏）

※中州状の島があった所に増林（手前）と松伏（奥）の領地の境界標識を示す木杭（きぐい）であろうか。（加藤幸一）
「重り土橋」は「おもりどばし」と読めないであろうか。（加藤幸一）

明治期の「松伏溜井（まつぶしためい）」

「埼玉県写真帖」（浦和図書館編）より



堰枠（せきわく）」、江戸時代は　重り（おも）土橋」

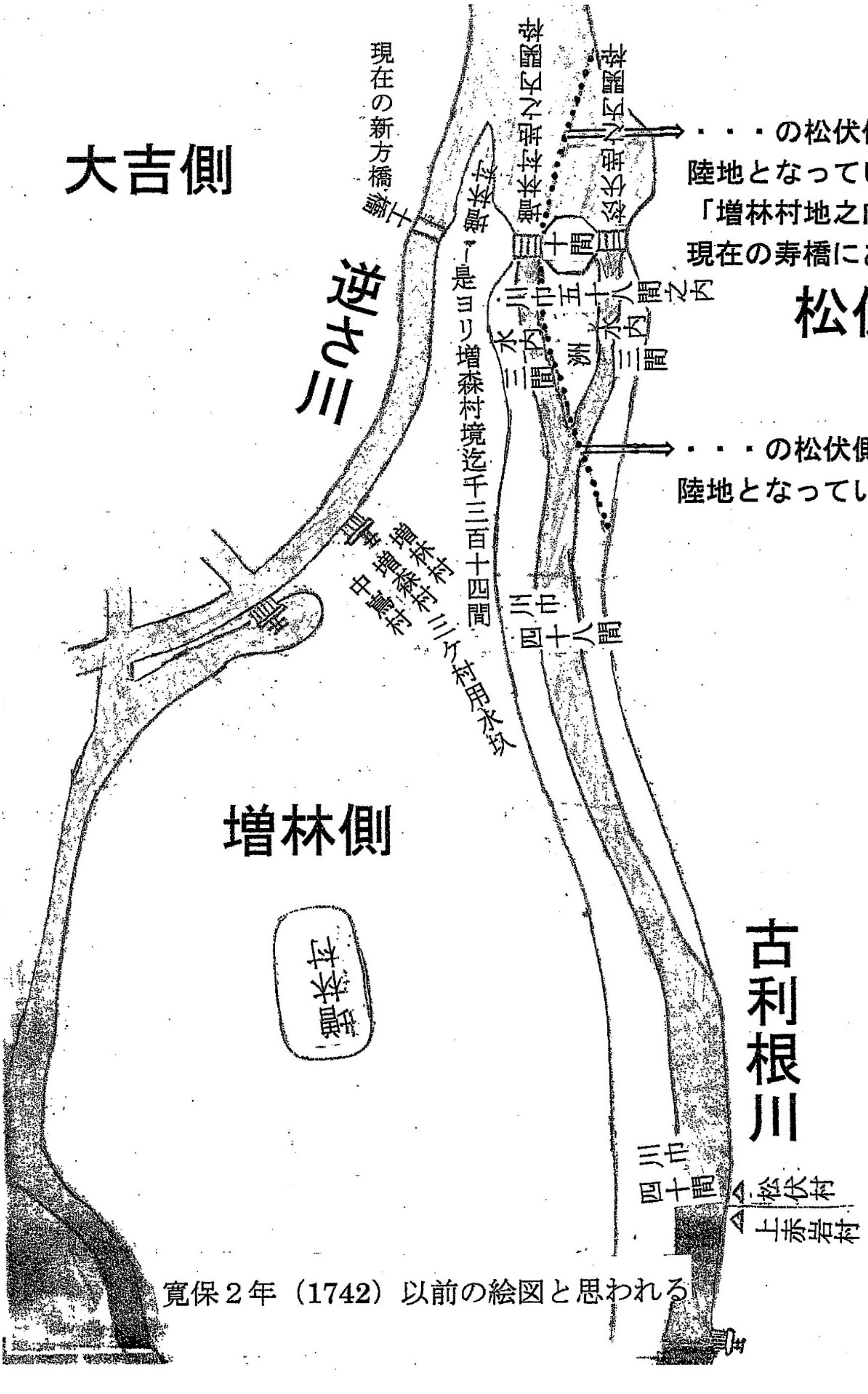
江戸時代の増林堰と松伏堰、その両堰枠を結ぶ中州（島）

大正 13 年の「葛西用水路沿革史」などから大谷達人氏は、古利根川に「堰が築造された当初は、東側に松伏に接するものと、西側に増林に接するものの２堰があり、古利根川のこの部分は二条に分かれて流れていた。両堰の間は中州状の島によって繋がっていた。しかし、寛保２年(1742)の大出水で松伏側の堰は大破したため修復されず廃止され土盛りされて陸地となり、増林側のみが翌年に細川越中守の手伝い普請で完全修復される。その後も度々の改修を経て今日に繋がる。」としている。

以下、そのことを裏付ける絵図である。

絵図の部　資料番号２６　江戸期「武蔵東部河川流域絵図」Ｎｏ．１５

解読　加藤幸一

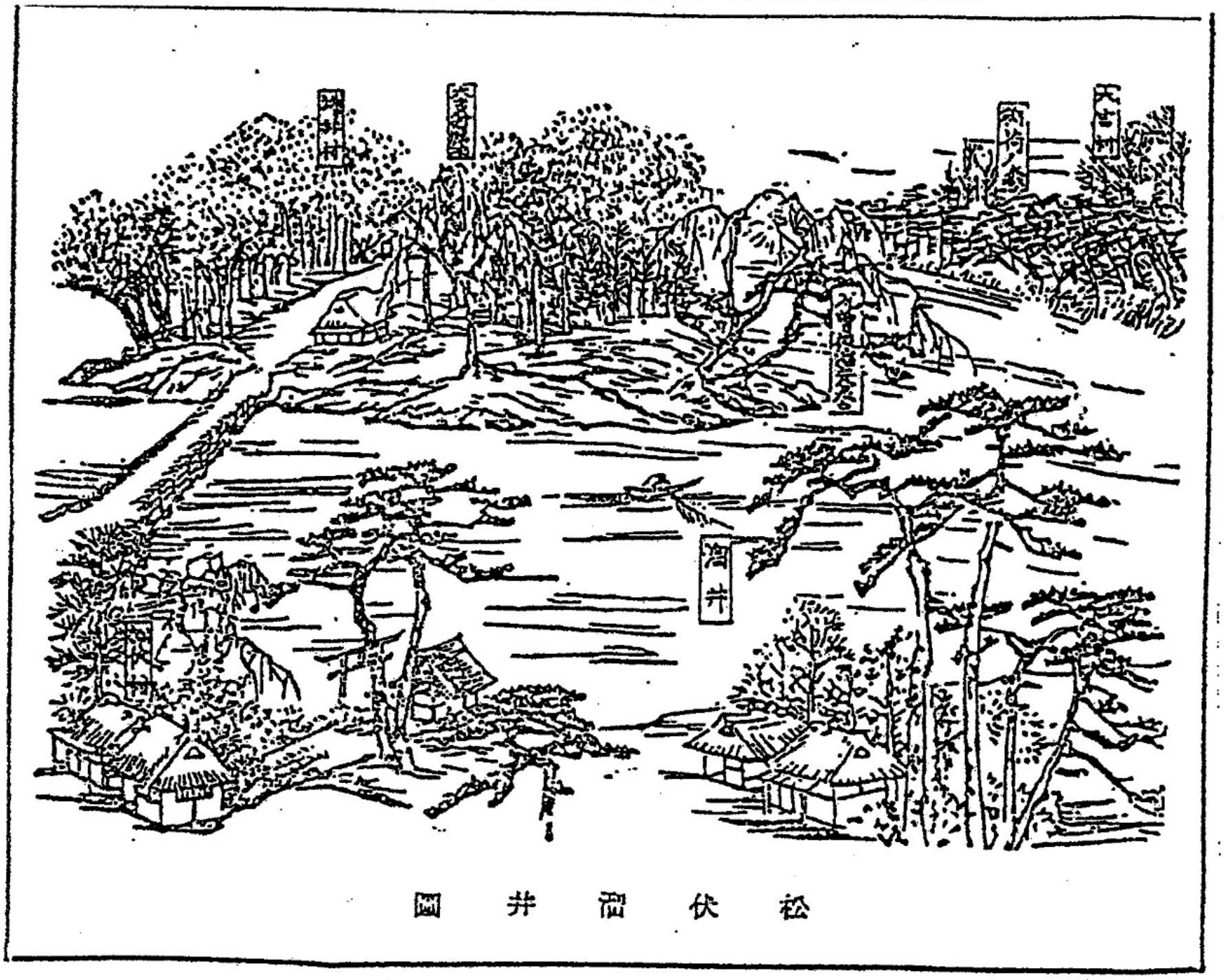

大吉側
現在の新方橋
土橋
逆さ川
増林村
是ヨリ増森村境迄千三百十四間
増林村地之内関枠
松伏村地之内関枠
十間
川巾五十八間之内
水内三間
洲
水内三間
松伏側
増林村
増森村
中島村
三ヶ村用水圦
川巾四十八間
増林側
増林村
古利根川
川巾四十間
松伏村
上赤岩村

・・・の松伏側は、現在は陸地となっている。
「増林村地之内、堰枠」は、現在の寿橋にあたる。

・・・の松伏側は、現在は陸地となっている。

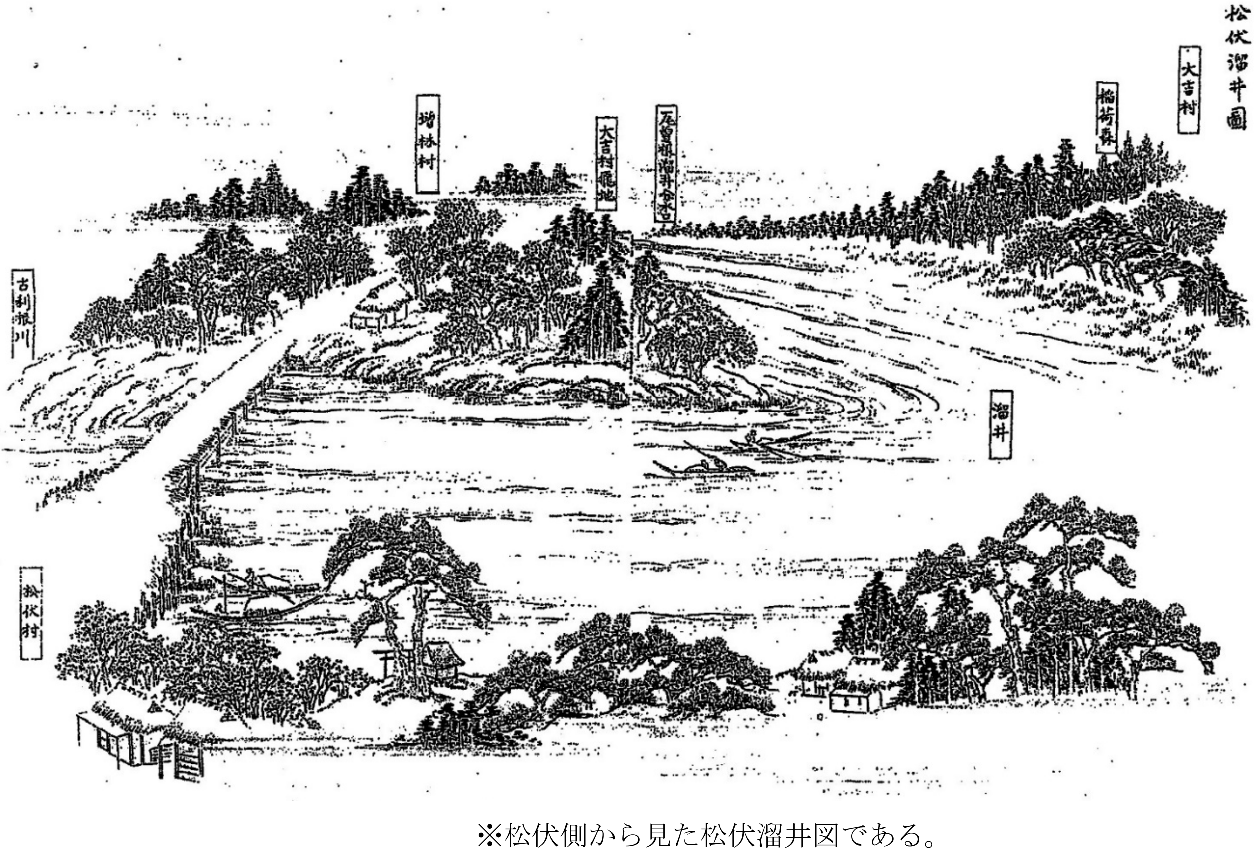
寛保２年（1742）以前の絵図と思われる

松伏溜井図（新編武蔵風土記稿）


増林村
稲荷森
大吉村
溜井

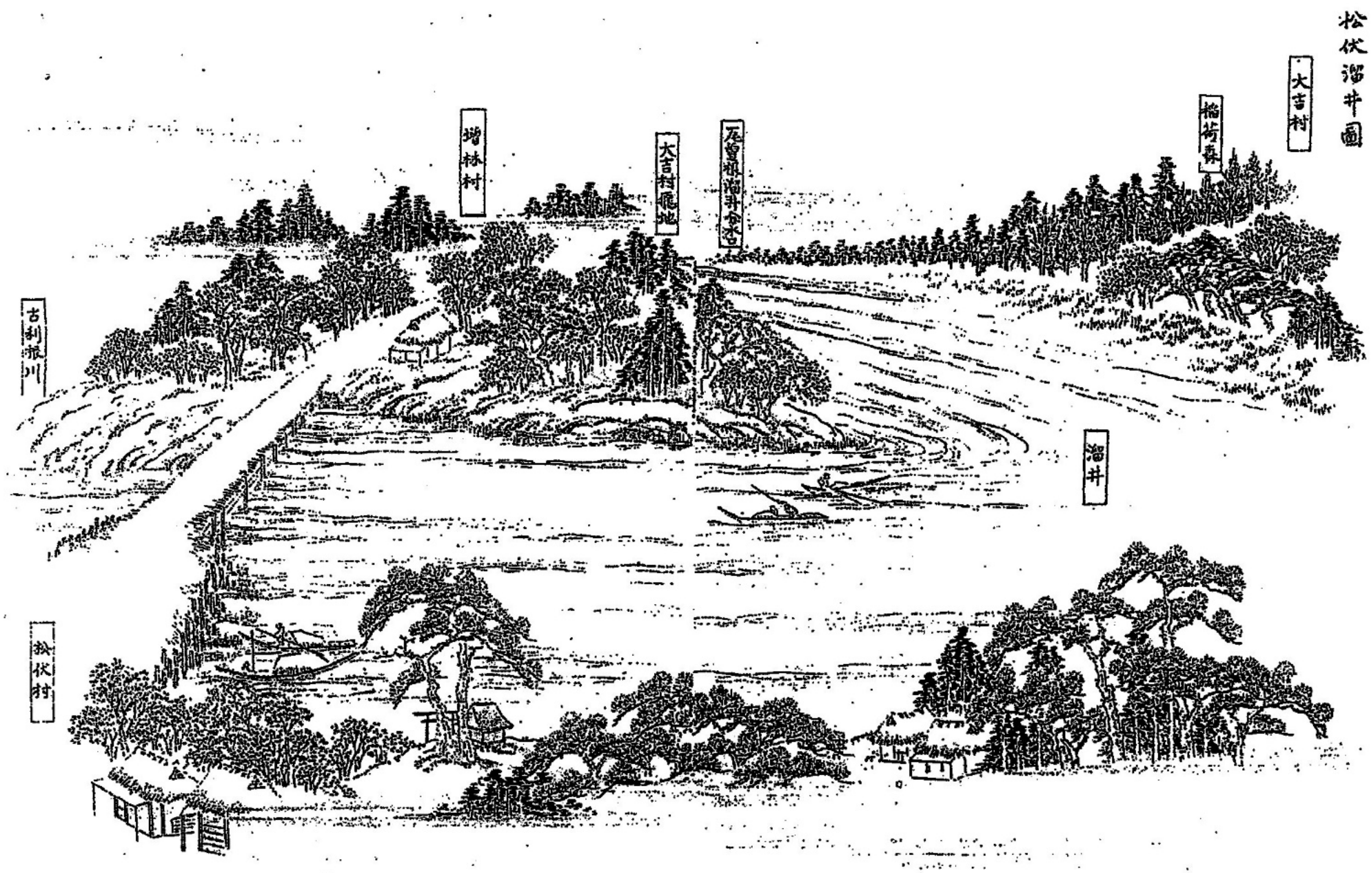
松伏溜井圖

葛飾郡之十五　松伏領


大吉村
稲荷森
庄曽根溜井余水口
大吉村飛地
増林村
古利根川
溜井
松伏村

松伏溜井圖

※松伏側から見た松伏溜井図である。



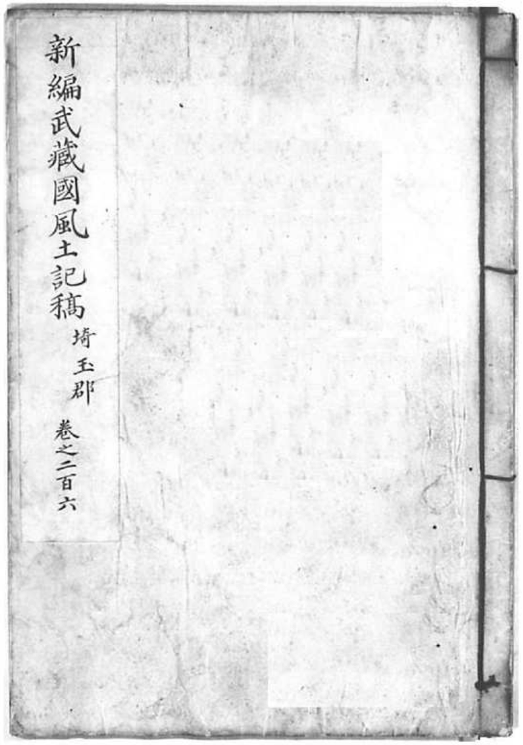
右の資料は、国立公文書館」所蔵、原田民自氏が写真撮影版として入手したもの

上の図は、松伏側から見た松伏溜井である。古利根川に架かる土橋（「重（おも、かさな）り土橋」、後の「堰枠」、現在の寿橋）を境に上流の広大な松伏溜井を松伏側から描いている。向かって右上の江戸時代の「稲荷の森」（図中「稲荷ノ森」）は、戦前の田川材木商の森を含む地域にあたる。このそばに流れる川が葛西用水（図中「瓦曽根溜井分水口」、つまり葛西用水の取水口）で、用水が大きな川のように大げさに描かれている。図中の「瓦曽根溜井分水口」の文字はもっと手前に記載するとわかりやすい。大吉村の飛地（図中「大吉村飛地」）には大吉村の鎮守、香取社の森や、猿島街道（野田街道）沿いには茶店らしき建物が描かれている。松伏側にある鳥居は水神社の鳥居である。現在は寿橋の袂（南東詰、野田街道沿い）に移転されている。

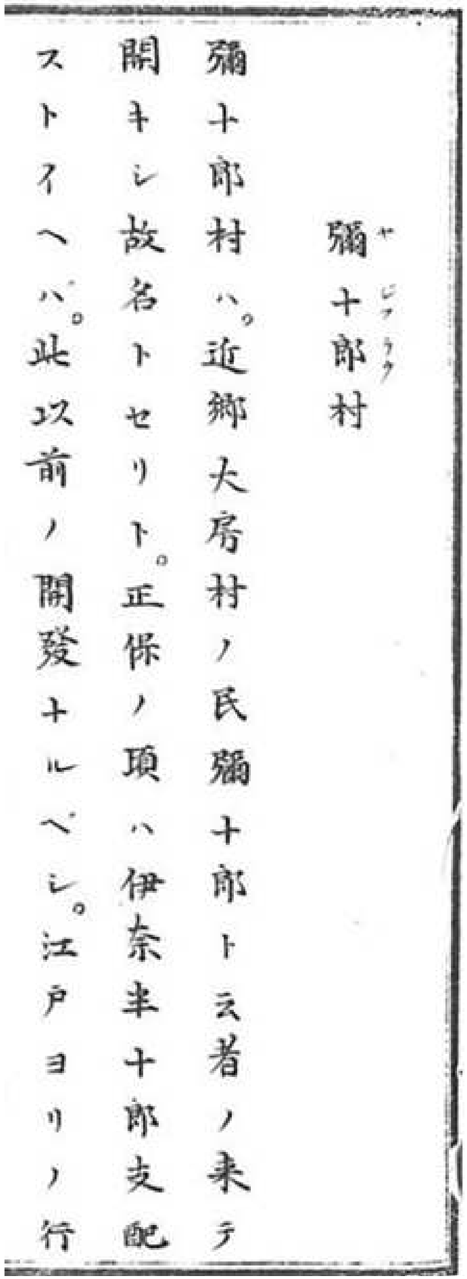
弥十郎村の名前のいわれ　新編武蔵風土記稿）

原田民自氏のインターネット　bc6745de.sakura.ne.jp/histpage064.html」の資料より抜粋

新編武蔵風土記稿　巻之二百六　埼玉郡之八　文化7年　1810）　国立公文書館）



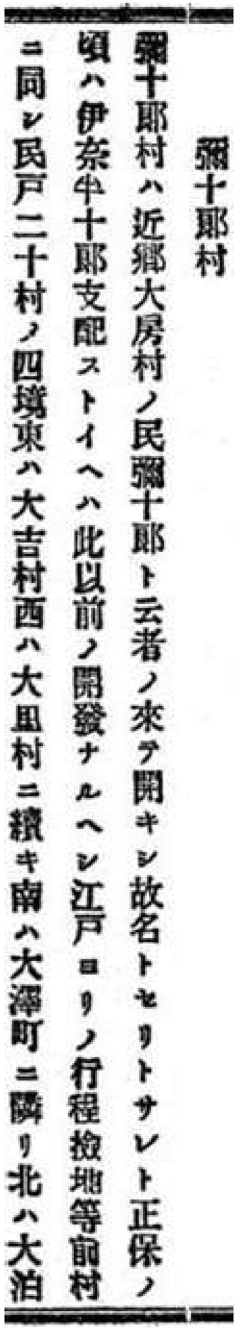
「新編武蔵風土記稿」
の原本



彌十郎村（ヤジフラウ）

彌十郎村ハ。近郷大房村ノ民彌十郎ト云者ノ来テ開キシ故名トセリト。正保ノ頃ハ伊奈半十郎支配ストイヘハ。此以前ノ開發ナルヘシ。江戸ヨリノ行

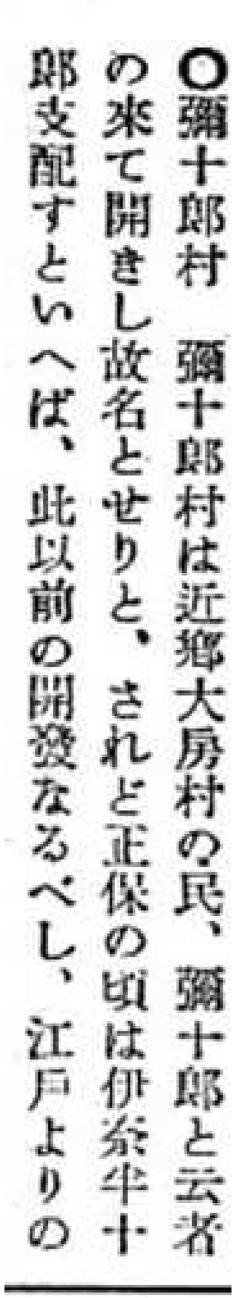
新編武蔵風土記稿　巻之二百六　埼玉郡之八　埼玉郡新方領弥十郎村　文化7年（1810）　国立公文書館



彌十郎村

彌十郎村ハ近郷大房村ノ民彌十郎ト云者ノ来テ開キシ故名トセリトサレト正保ノ頃ハ伊奈半十郎支配ストイヘハ此以前ノ開發ナルヘシ江戸ヨリノ行程撿地等前村ニ同シ民戸二十村ノ四境東ハ大吉村西ハ大風村ニ續キ南ハ大澤町ニ隣リ北ハ大泊

新編武蔵風土記稿　巻之二百六　埼玉郡之八　新方領弥十郎村　内務省地理局　明治17年）

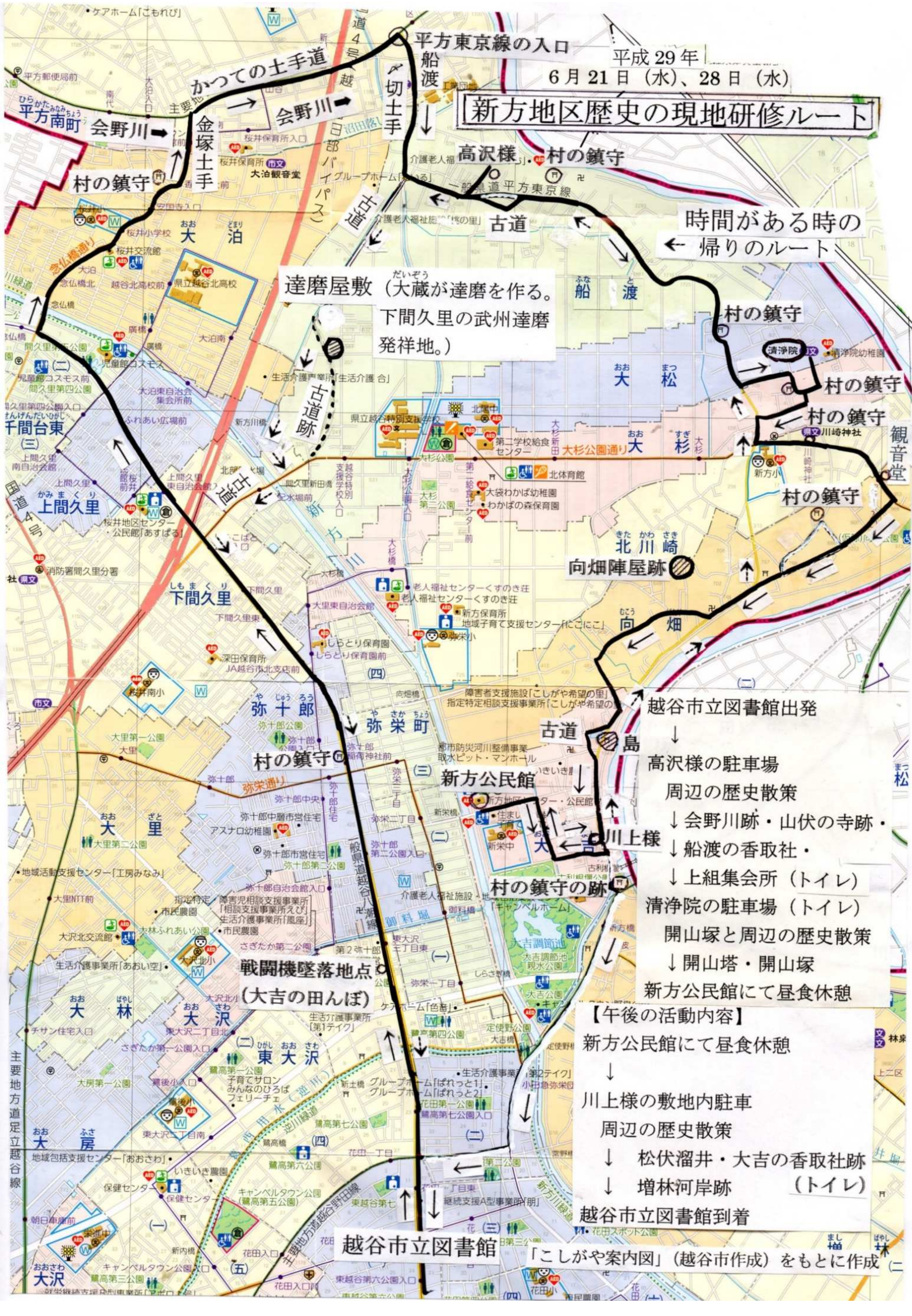


○彌十郎村　彌十郎村は近郷大房村の民、彌十郎と云者の來て開きし故名とせりと、されど正保の頃は伊奈半十郎支配すといへば、此以前の開發なるべし、江戸よりの

新編武蔵風土記稿　巻之二百六　埼玉郡之八　新方領弥十郎村　雄山閣版　昭和8年）

新方地区歴史の現地研修ルート

平成29年
6月21日（水）、28日（水）


平方東京線の入口
船渡
切土手
かつての土手道
会野川➡
会野川➡
金塚土手
平方南町
村の鎮守
高沢様
村の鎮守
古道
古道
時間がある時の
← 帰りのルート
達磨屋敷（大蔵が達磨を作る。
下間久里の武州達磨
発祥地。）
古道跡
古道
村の鎮守
清浄院
村の鎮守
村の鎮守
堂面の観音の堂
村の鎮守
北川崎
向畑陣屋跡
古道
島
新方公民館
川上様
村の鎮守の跡
村の鎮守
戦闘機墜落地点
（大吉の田んぼ）
越谷市立図書館

越谷市立図書館出発
↓
高沢様の駐車場
周辺の歴史散策
↓会野川跡・山伏の寺跡・
↓船渡の香取社・
↓上組集会所（トイレ）
清浄院の駐車場（トイレ）
開山塚と周辺の歴史散策
↓開山塔・開山塚
新方公民館にて昼食休憩

【午後の活動内容】
新方公民館にて昼食休憩
↓
川上様の敷地内駐車
周辺の歴史散策
↓　松伏溜井・大吉の香取社跡
↓　増林河岸跡　（トイレ）
越谷市立図書館到着

「こしがや案内図」（越谷市作成）をもとに作成